

# 東郷高塚 I

福岡県宗像市日の里所在前方後円墳の調査報告

宗像市文化財調査報告書 第21集



1989

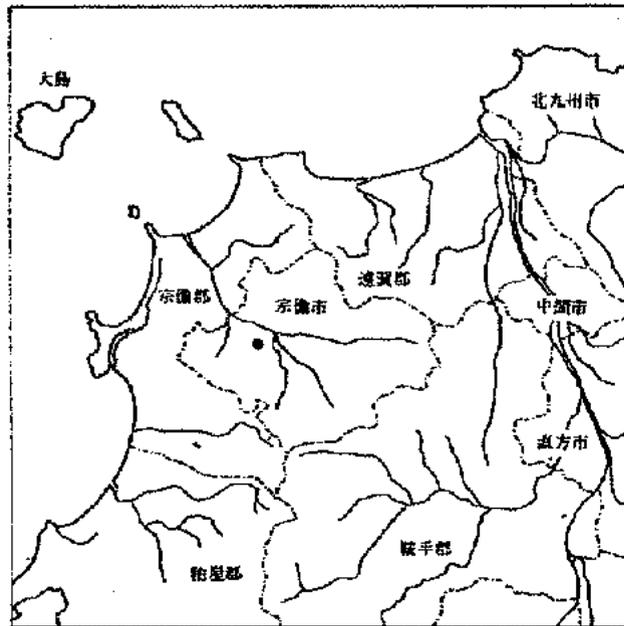
宗像市教育委員会



TO GO TAKA TUKA  
東郷高塚 I

福岡県宗像市日の里所在前方後円墳の調査報告

宗像市文化財調査報告書 第21集



## 序 文

1市3町1村をかかえる宗像地域は、沖ノ島遺跡をはじめ数多くの遺跡が密に分布しており、古代史の解明にとって重要な役割を担っています。

宗像市における近年の発掘調査では、縄文時代遺跡の発見や、銅剣、銅矛、蛇行鉄器の出上など、古代宗像の歴史像が徐々に明らかになりつつあります。

宗像市教育委員会は、重要遺跡確認調査の一環として、本古墳の発掘調査を昭和61年度から3ヶ年にわたって実施しました。

調査の結果は、埋葬主体部が盗掘を受けており、主要な副葬品を欠いていましたが、本古墳が当地域最古の前方後円墳であり、この地域を統括した首長墓であることを明らかにすることができました。

本書が、古代文化研究の一助として活用されるとともに、文化財の保存、活用に貢献されることを願うものであります。

なお本古墳の調査を先頭に立って指揮していた酒井仁夫氏が、昭和63年1月11日に急逝しました。当市の文化財行政にとってまことに大きな損失となりました。慎んで氏のご冥福をお祈り致します。

末尾になりましたが、調査にあたり、貴重な御助言をいただいた諸先生、御協力、御援助をいただいた多くの方々へ心からの謝意を申し上げます。

平成元年3月31日

宗像市教育委員会 教育長 森 下 照 清

## 目 次

1. はじめに	1	5. その他の遺構	22
2. 古墳の位置と環境	2	6. 出土遺物	23
3. 発掘調査	4	7. おわりに	26
4. 遺 構	18		

## 例 言

1. 本書は、宗像市教育委員会が事業主体となって、昭和61年度から昭和63年度にかけて国庫補助を受けて実施した発掘調査の報告である。
2. 遺構の実測は参加者全員であたり、原俊一が取りまとめ、製図は清家直子による。
3. 遺構の写真は原が、遺物写真は清水比呂之が撮影した。
4. 本書使用の方位は磁針である。
5. 本書の執筆・編集は原が行った。
6. 本古墳は、後円部墳頂中央に(0.0)を置き、前方部側を北として、保存杭を設置し、将来に備えた。
7. 本古墳の調査区については、将来の調査による誤認のないように、別表のとおり設定した。

## 1. は じ め に

### 調査に至る経過

本古墳は、宗像市日の里3-4-17に所在する。この地は「日の里12号公園」と呼ばれ、敷地面積12,782㎡の中に、他の円墳3基とともに鬱蒼とした緑に覆われている。

本古墳群は1965年に始まった東郷地区区画整理事業に先立つ事前踏査で発見され、現状保存することで今日に至っている。<sup>(注1)</sup>

1975年には、12号公園の環境整備事業が計画され、事前の測量が、福岡県文化課の派遣を得て、9月に実施された。<sup>(注2)</sup>

その後、環境整備事業は公園内に遺跡の案内板が立てられるにとどまった。

1985年9月26日に文化財保護条例(条例21号)が施行されたが、本市には史跡が1件もないこともあり、かねてから古式の古墳として評価を受けていた本古墳の調査を重要遺跡確認調査として、1986年から3ヶ年をかけて、国・県の補助を受けて実施した。

		組	織	
総 括          庶務・会計 発掘調査	宗像市教育委員会	教 育 長	竹 原 暎	(前任)
			森 下 照 清	
		教 育 部 長	白 木 国 明	
		社会教育課長	乙 藤 重 松	(前任)
			吉 田 繁 利	
		社会教育係長	井 上 弘	(前任)
		文化係長	尾 山 清	
		主任主事	大 賀 由美子	
		主任主査	酒 井 仁 夫	
		主任主事	原 俊 一	
		技 師	清 水 比呂之	
		技 師	安 部 裕 久	

### 年次調査概要

初年度(1986年9月22日~1987年1月31日) 墳丘、周辺地形測量、1~10トレンチの調査(5・6トレンチは未調査)

2年度(1987年11月24日~1988年3月31日) 主体部、11~14トレンチの調査、1・2トレンチの再調査。

3年度(1988年4月1日~9月27日) 1・2トレンチ、主体部調査、埋め戻し。

調査補助 高久健二(九州大学考古学研究室) 藤井隆晴・鷺見昌尚・吉田浩二(福岡教育大学)  
池ノ上宏(国学院大学)

なお、調査にあたって、渡辺正氣、佐田茂、石山勲、小林行雄、西谷正の諸先生から貴重な指導助言を受けた。記して謝意を表したい。

註1. 春成秀爾ほか 1967 東郷遺跡群 日本住宅公園

2. 新原正典 1980 東郷高塚古墳 石丸遺跡 宗像町文化財調査報告書 第4集

## 2. 古墳の位置と環境

本古墳を含む一帯は旧字名を「高塚」と呼ばれており、墳墓として従来から考えられてきたものと思われるが、古墳としての初見は1965年である。現在保存されているのは本古墳と、後円部の左右に2基の円墳である。円墳は墳頂部が平で、墳丘は全面版築の可能性があり、主体部は粘土槨・箱式石棺、竪穴式石室のいずれかであろう。遺物は確認されていない。

現在の宗像市は内陸盆地地形で、中央を東西に貫流する釣川が、盆地を抜けるあたりから北流し、玄界灘にそそぎ込む。盆地は周辺の山塊に囲まれており北西部のみが釣川により開口している。

本古墳は、市の西南部の許斐山(271.0m)から北へのびる丘陵の先端部に立地し、北に宗像盆地の開口部を目前にし、東は市域最大の農耕地を見、西は津屋崎の海岸部へ抜ける好位置を占める。

本古墳を含む一帯は、かつての区画整理事業により、217.6haが宅地化した。この事業では、弥生時代から中世にかけての集落や墳墓が記録保存されて消滅した。

古墳は、5基が記録保存されたが(6号墳は一部調査のみで、現在の12号公園内崖面にかろうじて残っている)、本古墳に相先後する時期のものは明確にできなかった。この中でスベットウ(東郷1号墳)古墳は、本古墳の西南約800mの距離にあり、大きな谷地を挟んで位置する前方後円墳である。全長40m級のものと考えられる。主体部は後円部に横穴式石室が構築されていた。石室のプランや壁体の構築は宗像地域をよく特徴づけているものであり、久原Ⅱ-3号前方後円墳とも、墳丘規模や主体部に同一性が見られる。6世紀前半の築造になるものであろう。

宗像市郡を通じて、本古墳に直接つながる前方後円墳は現在のところ発見されていない。5世紀代の古墳では津屋崎町の海岸部に調査例がある。宗像地域の古式古墳は低墳丘の円墳で、主体部に箱式石棺や粘土槨、土壙墓が見られ、武器、武具、鏡片等の出土品がある。

宗像市内に限って前方後円墳を概観すると、本古墳を除く7基、全ての前方後円墳は6世紀代に築造されており、各古墳が系列的につくられたものか並列的なものかは今後に検討の余地がある。

今後は、宗像地域に本古墳に相先後する前方後円墳の発見が待たれるところである。

註3. 清水比呂之 1968 久原遺跡 宗像市文化財調査報告書 第19集 宗像市教育委員会

4. 石山 勲 1977 新原・奴山古墳群 福岡県文化財調査報告書 第54集 福岡県教育委員会

東郷高塚 I



図1 位置図 (1/50,000)

### 3. 発掘調査

#### 調査の方法

初年度に設定した測量杭をそのまま利用して後円部の中心を(0.0)とした。前方部方向を略北とした後、0を中心に東西南北を区画し、測量軸線にそって各トレンチを設定した。このため、本文中の東西南北は略磁針による設定である。また、主体部も埋葬主体がほぼ軸線を通るため、従来の測量区画のまま、測量・実測を行った。なお、(0.0)を中心として、約10m・20m間隔で、頭部の一辺10cm角のプラスチック製の保存杭を埋め込んでいる。

#### 墳丘の現状

墳丘は椎の木等の樹林に覆われていて、昼なお暗い印象を与えている。現状では全長61m、後円部径30m、後円部高7m、前方部高5m、くびれ部幅11m、前方部端部幅約18mを測る。墳丘の主軸は北西から東南におき、丘陵の尾根線に直交する占地のしかたである。後円部は全体として、墳形を保っているが、前方部上面、前方部東西側面は畑地造成により削平を受けている。また東側の後円部からくびれ部にかけては中世以降の墓地形成により墳形の乱れが見られる。

#### 各トレンチの記録

1. 1トレンチ(図2・図版3) 初年度は44.48㎡の区画を設定し、表土除去後に地山を確認してすぐ埋め戻したが、次年度の他のトレンチ調査で事実誤認とわかり、28㎡に縮小して再調査を実施した(一部拡張)。(0.S19.20m)で後円部墳裾を確認した。この地点の標高は26.65mである。墳裾から南へ4.88mの地点で外堤の裾(0.S24.08)を確認した。外堤上面の地山高は27.70mである。外堤と後円部に挟まれた溝底は平坦である。後円部および外堤部の立ち上がりには葦石等の施設は認められず、トレンチ内にも塊石が2~3点あったのみである。なお外堤部には盛土が認められなかった。溝の埋土中位から掘られた2基の火葬所が発見された(1号・2号火葬所)。

2. 2トレンチ(図3・図版3) 初年度は46.62㎡の区画を設定して発掘したが1トレンチ同様の事実誤認があり、次年度は28㎡に縮小して再調査を実施した。初年度の調査において外堤側に2基の弥生時代堅穴(1・2号堅穴)を確認し、1号堅穴のみを調査・記録した。2年度において後円部西側墳裾を(W19.0, S0)で確認した。墳裾から西側へ4.34mの地点で外堤の裾(0.W23.34)を確認した。溝底のレベルは26.65mで平坦である。外堤上面の地山高は28.94mを測る。後円部、外堤の立ち上がりとも葦石等の施設はなく、トレンチ内には石は認められなかった。なお、後円部地山面に火葬所(3号火葬所)と溝の埋土中から掘りこまれた火葬土壌墓?が土層面に認められたが、骨片の採取はなく、調査は実施していない。

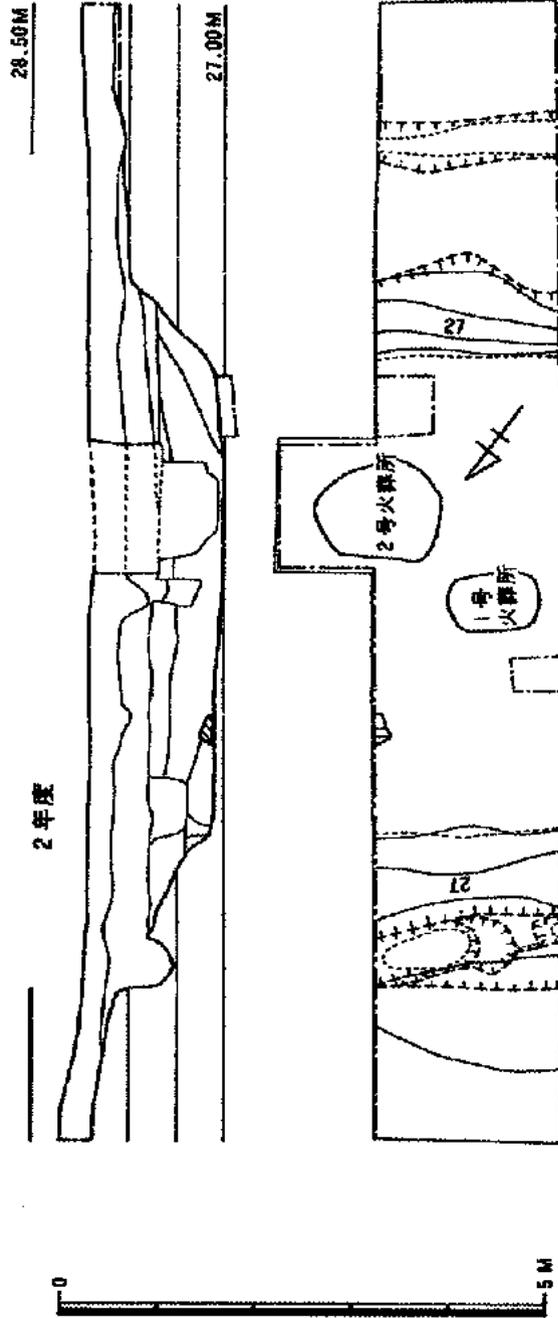
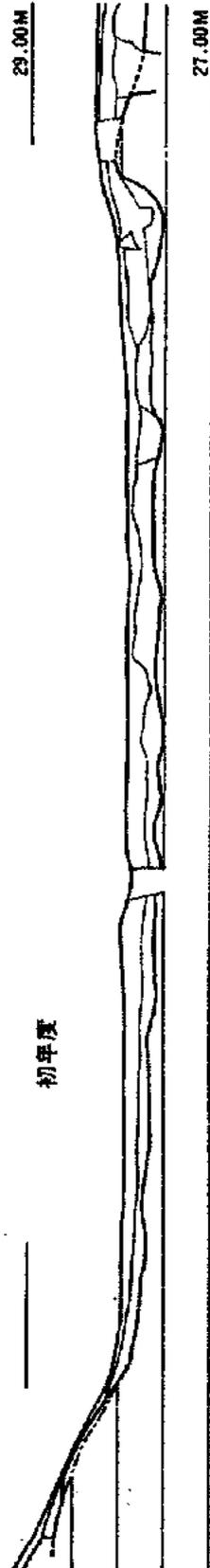


図 2 トレンチ実測図 (1/80)

3. 3 トレンチ (図4・図版3) 初年度に25.14mについて調査した。トレンチは現代墓群により攪乱を受けていた。土層図から (0. E19.96) の地点で後円部墳裾を確認した。墳裾から3.92m東の (0. E23.88) のところで外堤の裾を認めた。礎底は標高26.20mで平坦面をつくる。外堤上面の標高は26.60mで盛土は確認できなかった。後円部・外堤とも立ち上がりに葺石等の施設はなかった。

4. 4 トレンチ (図5・図版4) 初年度に25.77mについて調査した。一部樹木により未調査の部分を含むが、表土下は墳丘面を保ち、表面に拳大の玉石が散乱する状態が認められた。現存墳丘の段には葺石等の施設が認められないために、段築と断定できない。基底部の変換点を墳裾とすると (0. N45.20) となる。また基底部標高は25.30となる。

5. 7 トレンチ (図6・図版4) 前方部東側の墳裾を確認するための調査であったが、トレンチ内はほとんど墳丘の削平を受けていた。トレンチ東隅に段落ちを確認し、墳裾を捉えたと思っただが、次年度調査との関わりからすると、墳裾は本トレンチから、さらに東へ延びるようである。葺石等の施設はなかった。南壁の最東部の基底標高は25.60mを測る。

6. 8 トレンチ (図6・図版4) 前方部西側の墳裾と墳丘段築を確認するための調査となったが、大半が墳丘の削平部分であることがわかった。このため、トレンチの南壁に沿って幅2mのサブトレンチを設定した。このサブトレンチにより墳裾と考えられる立ち上がりを確認した。立ち上がりには葺石等の施設はなく、トレンチ内には石材は検出していない。基底面の標高は25.20mとなる。

前方部の墳丘上には、平坦面および傾斜面に拳大の石の築石が認められたが、現状では葺いた状況とはいえない。しかし、これらの玉石の出土は、何らかの施設を思わせる。

7. 9 トレンチ (図9・図版5) 東側くびれ部の確認のための調査トレンチである。くびれ部の狭い墳丘を想定していたため、墳裾を東壁際で確認することになった。墳丘立ち上がりには葺石は認められず、トレンチ内には数個石材を認めるのみであった。基底面から1mほど上部埋土層に中世以降の遺物の集中が見られた。基底面の標高は25.66mである。後円部の立ち上がり傾斜面は現代墓の改葬により攪乱を受けている。くびれ部から前方部へ移る斜面で土師器壺が横位状態で出土した。さらに前方部側では粘土を含んだすり鉢状の土塊が検出された。

8. 10 トレンチ (図10・図版5) 西側くびれ部を確認するためのトレンチであったが、9トレンチ同様にくびれ部径が大きくなったため、基底面を西側に寄ったところで確認することになった。上部埋土層には中世以降の遺物が見られた。くびれ部の基底面に110cm×75cmの隅丸長方形掘り込みが確認された。深さは25~30cmのもので遺物は出土していない。前方部側の現状裾ラインは明瞭となっていたが後円部側では墳裾を追いかけることが難しい。葺石が認められないために、墳丘規模を明確にすることは難しいものと思われる。くびれ部の基底標高は26.00m、南壁部の基底面標高は25.53mとなる。

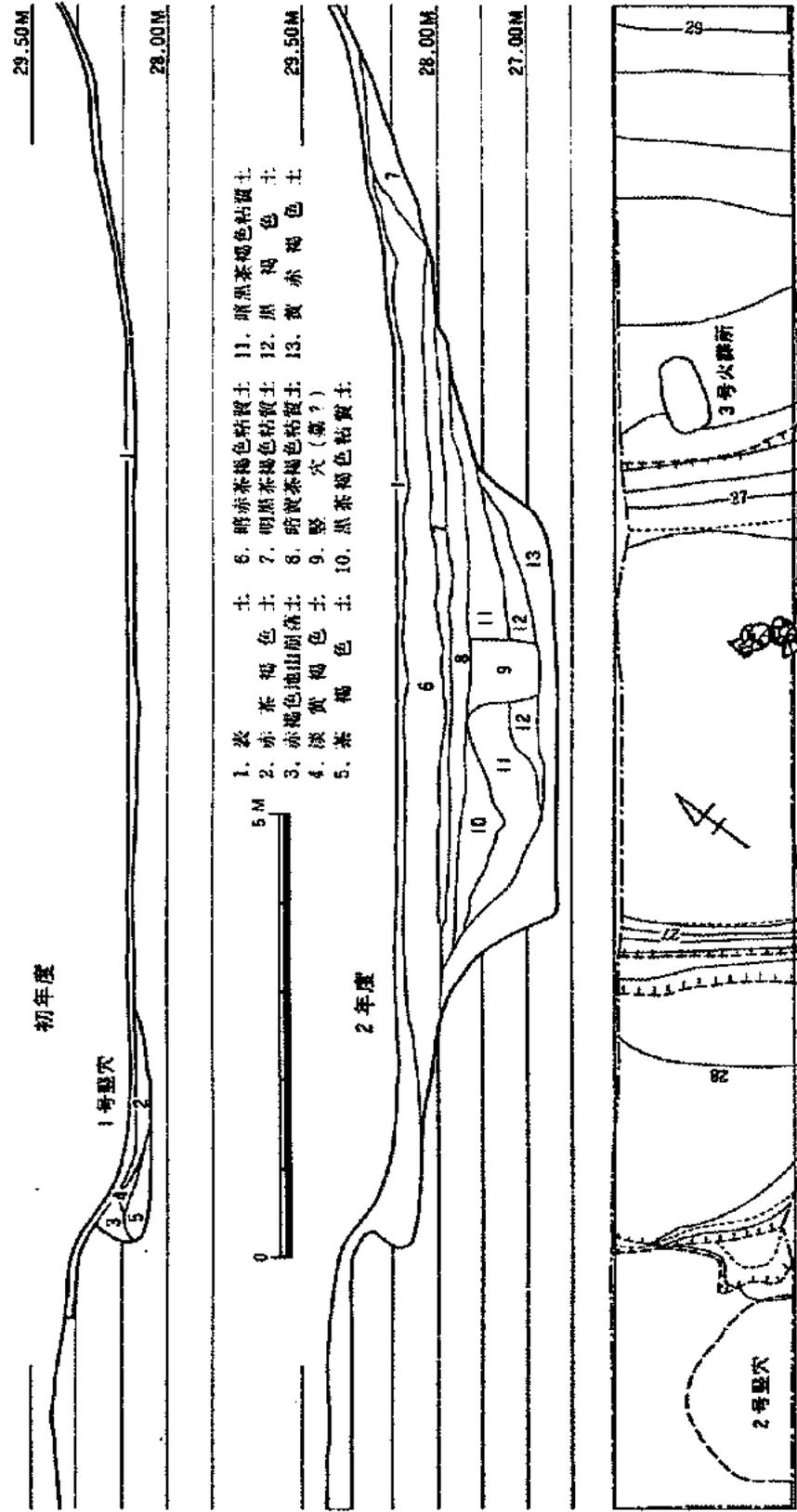


図 2 トレンチ実測図 (3/80)

9. 11トレンチ (図11・図版5) 西側の前方部端部を確認するためのトレンチである。表土除去に地山が現れた。トレンチの東南部でL字状にのびる墳裾を確認したが、葎石等の施設は検出できなかった。基底面での標高は西側で25.30mとなり、前方部北側では25.20mである。

10. 12トレンチ (図12・図版5) 初年度の7トレンチで墳裾を明確にできなかったために、2年度はさらに東側へ延ばしてトレンチを設定した。表土下に2層の埋土堆積があった。東北部は畑地造成による丘陵削平を受けていた。地形の変換が非常にゆるやかなために墳裾を捉えるのに困難を極めた。墳裾からの立ち上がりには葎石等の施設はなかった。南壁部分での基底面標高は25.54mとなる。

11. 13トレンチ (図13・図版6) 前方部の東北端部を追求するためのトレンチである。表土下に地山が現れた。前方部側は畑地造成により削平を受け、墳丘規模確認の成果はあげられなかった。

12. 14トレンチ (図14・図版6) 調査前には後円部から前方部へ移るところに比高差1mほど段があり、後円部墳裾と外堤の延長部を確認するためのトレンチを設定した。その結果、後円部の基底面は段を設けずに連続することがわかった。東壁の土層は23層あり、墳裾での埋土は1.5mである。南壁土層図では表土から溝の底まで1.8mの埋土があった。また溝底部での幅は1.3mと狭くなる。後円部墳裾から1.2m立ち上がったところに石組み遺構を検出した。外堤は現状より径が小さくなり、調査前の推定外堤裾からは長さ5

m内側へ入り、深さで1.8m低くなった。外堤は全周するのではなく、後円部を馬蹄形に囲むだけで終息している。現状の外堤端部裾からは3mほど延びる程度である。溝底の標高は26.30mである。溝中央の埋土中から土師器の集積が見られた。遺物は大きく2層に分けられる。下層の遺物には壺形の土師器が横位で出土したが、出土位は地山から25cmほど浮いている。

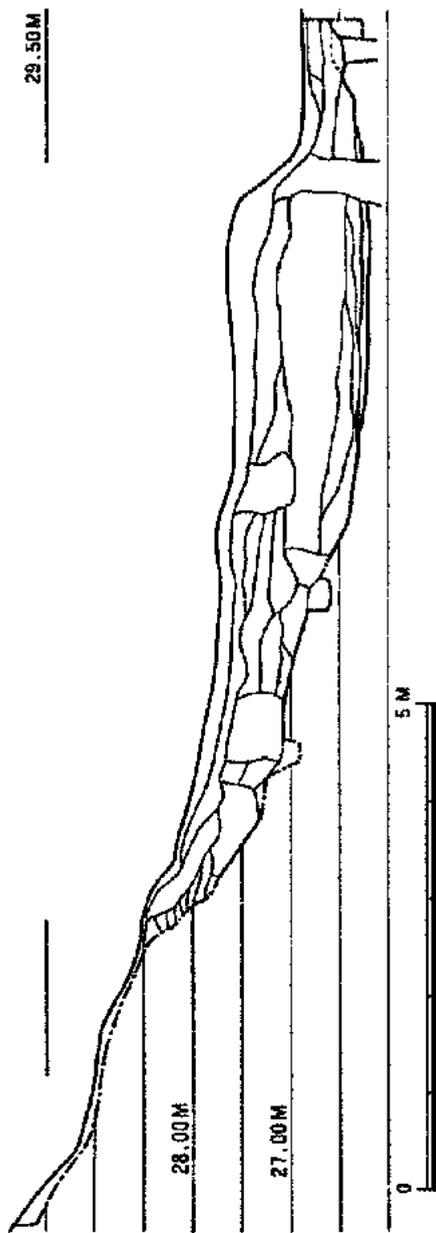


図4 3トレンチ実測図 (1/80)

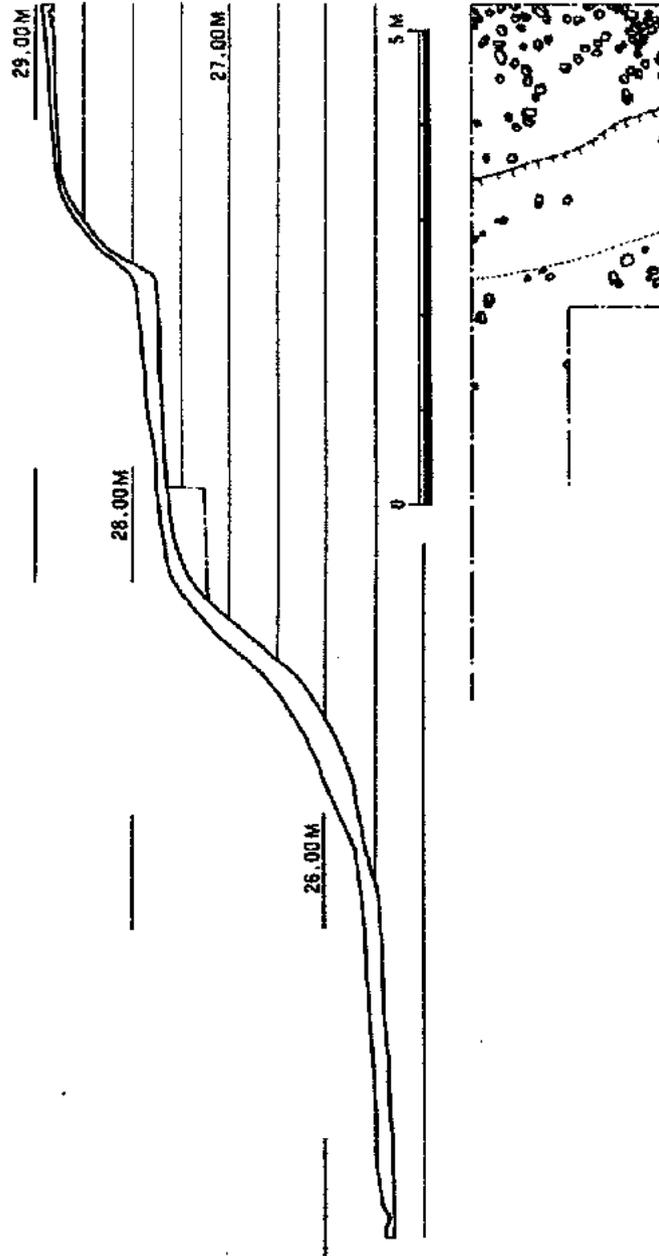


図5 4トレンチ実測図 (1/80)

東郷高塚 I

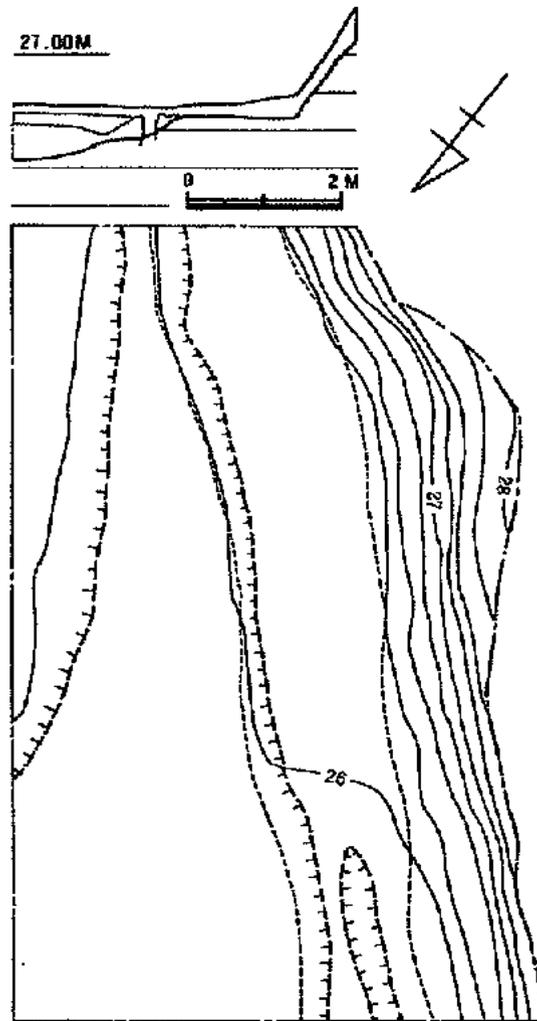


図6 フトレンチ実測図 (1/100)

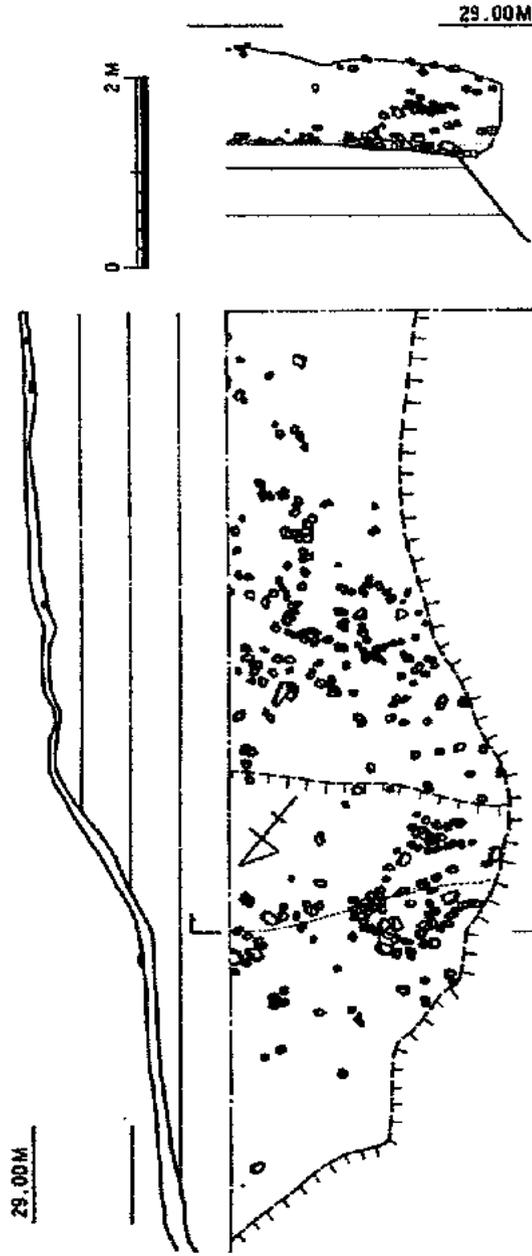


図7 ■ トレンチ墳丘図 (1/80)

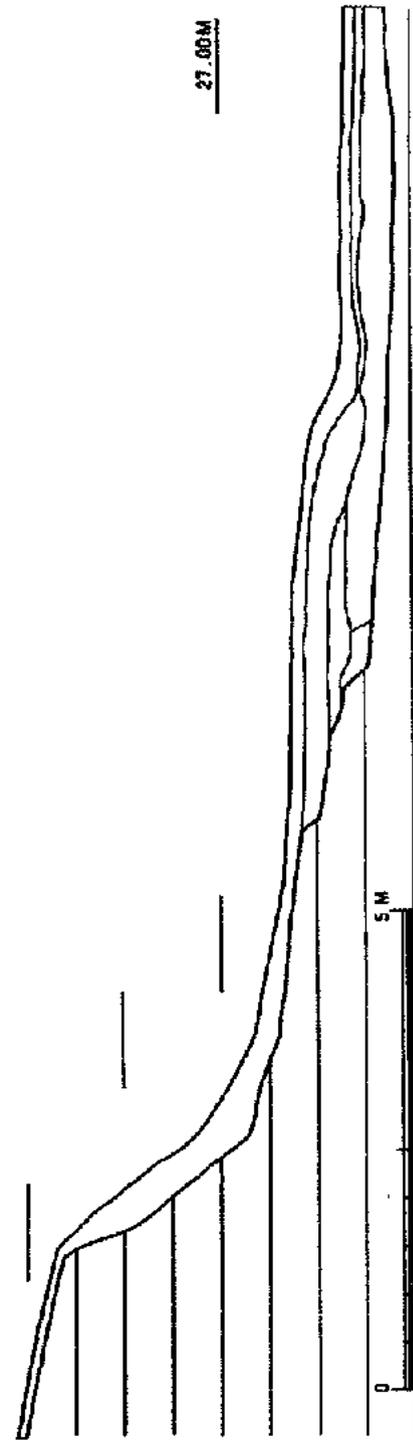


図8 ■ トレンチ南壁土層図 (1/80)

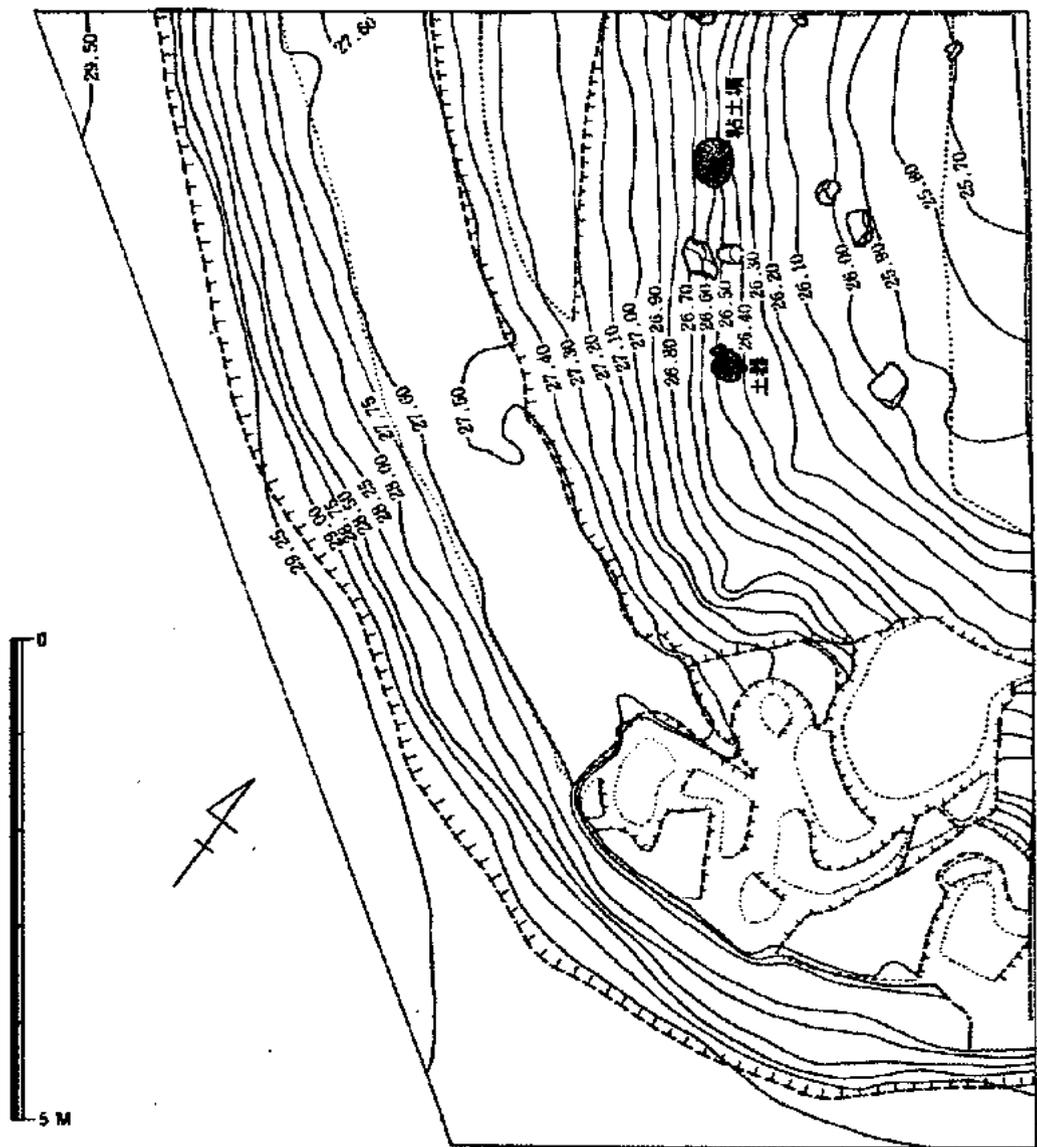
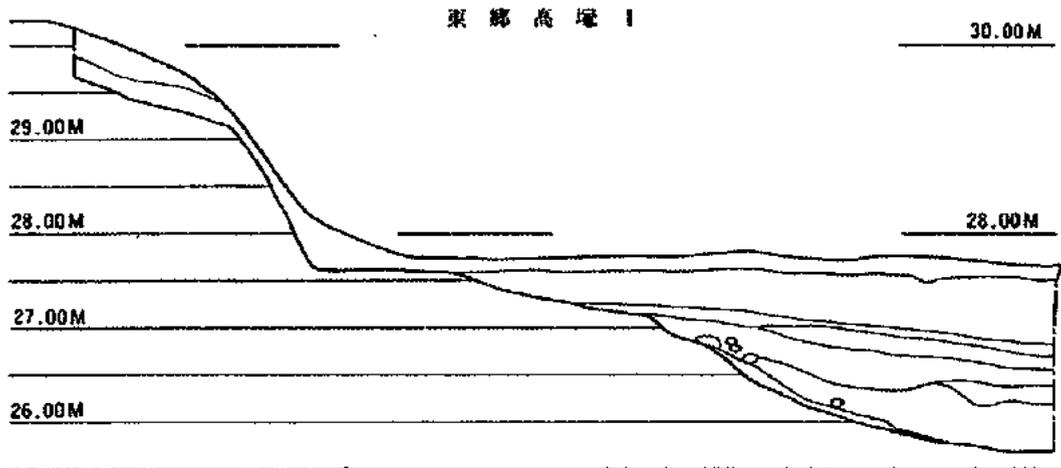


図 9 トレンチ実測図 (1/88)

東郷高塚 1

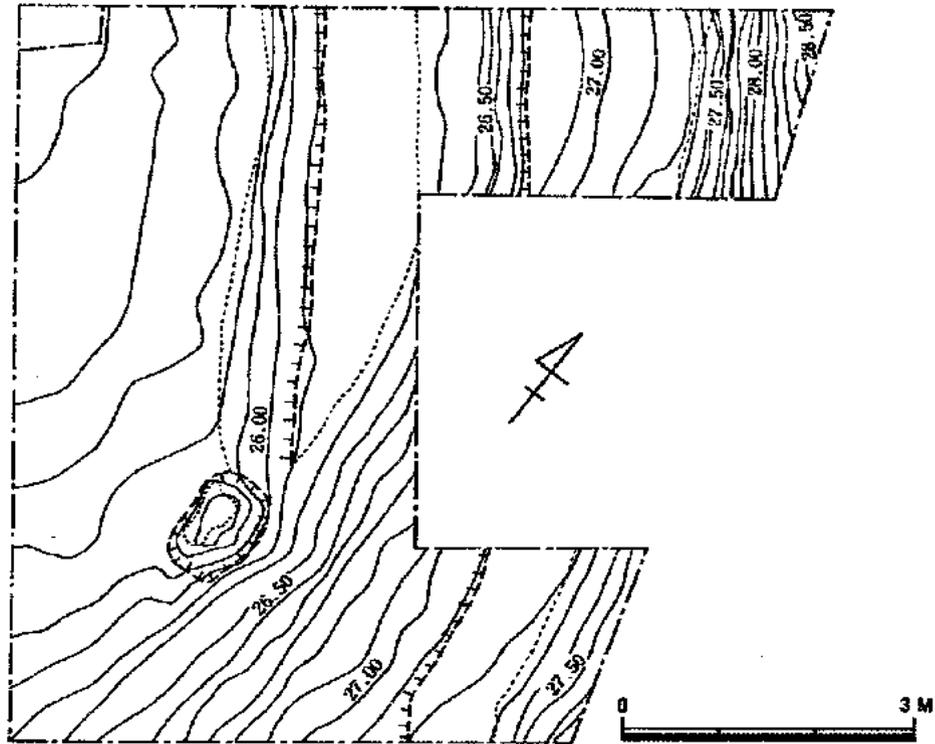
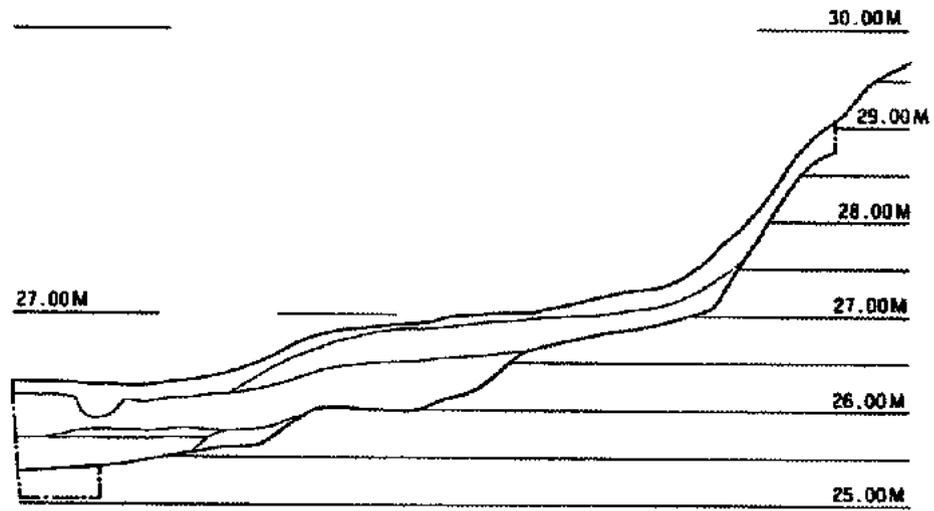


図18 10トレン子実測図 (1/30)

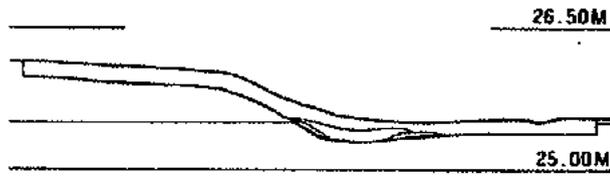


図11 11トレンチ実測図 (1/40)

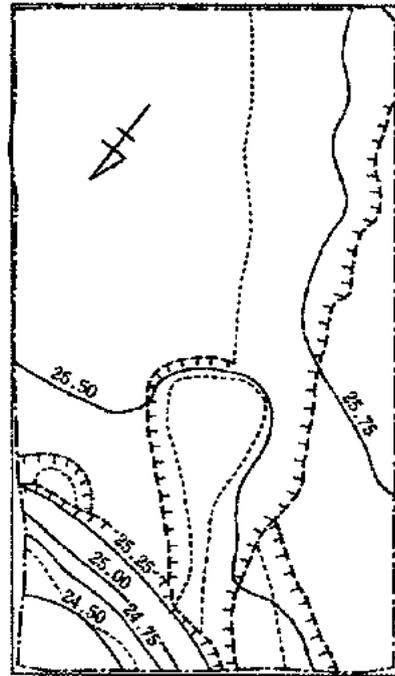
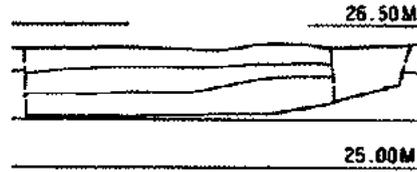
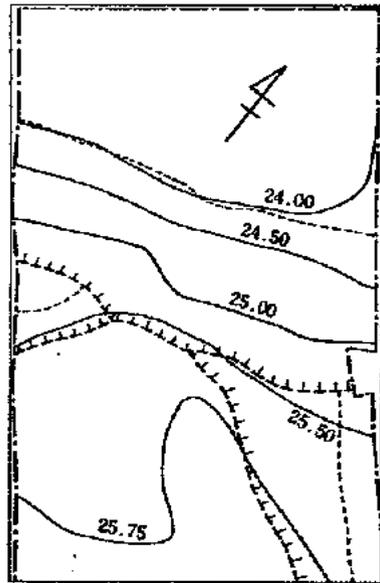
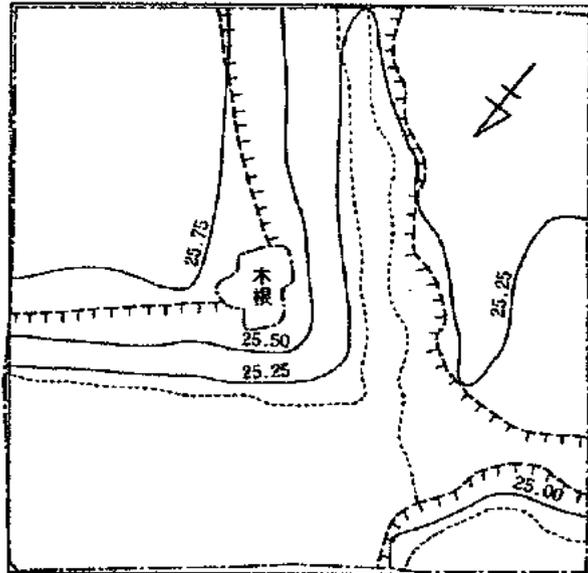


図12 12トレンチ実測図 (1/40)

図13 13トレンチ実測図 (1/40)

東郷高塚 I

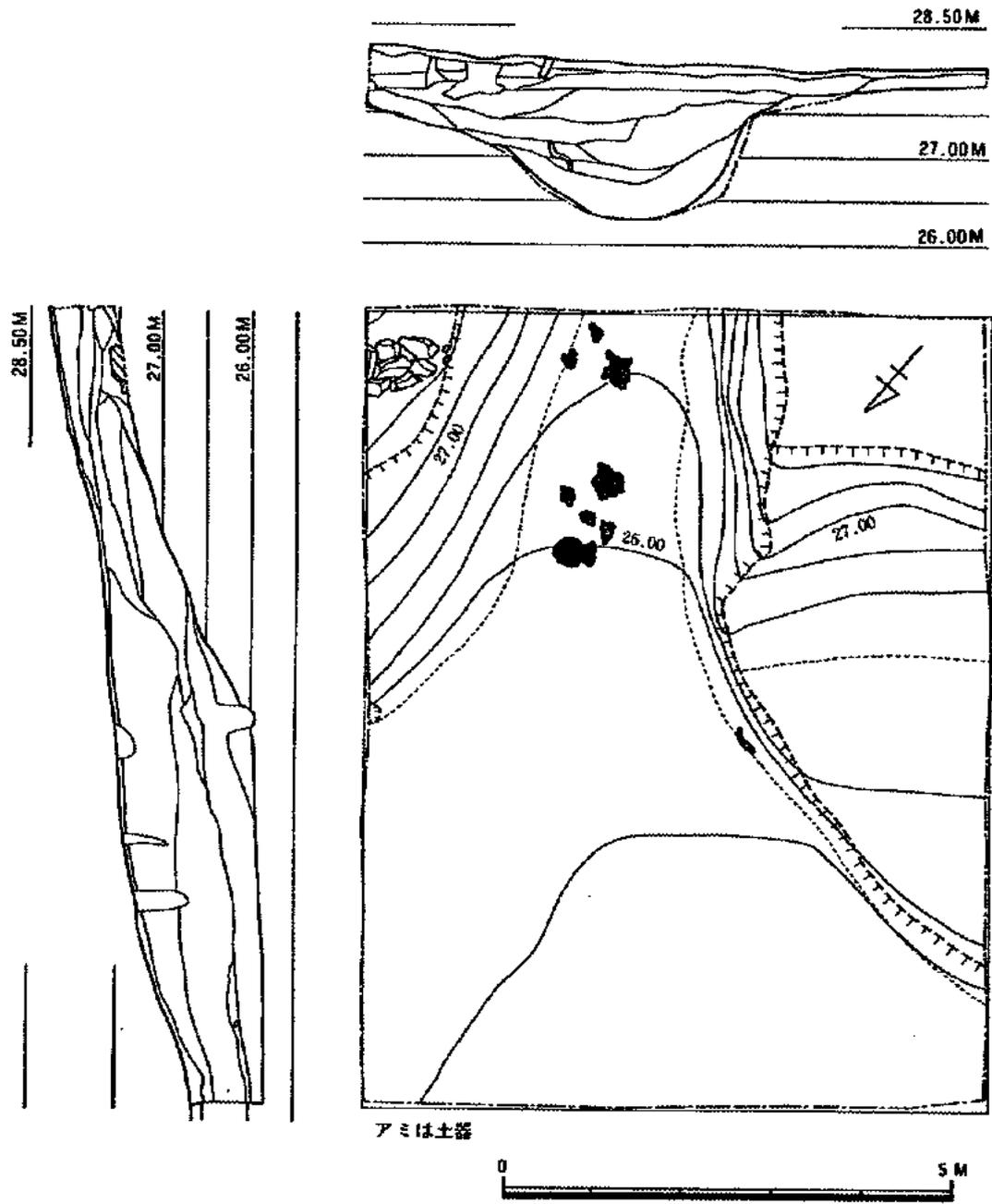


図14 14トレンチ実測図 (1/80)

13. 主体部 (図15・図版7・8) 後門部の0点から幅1mの長さ3mずつの十字トレンチを設定した。この十字トレンチを約1m下げた段階で観察した結果、墓壁、および埋葬主体を明確にできなかったために十字トレンチを北トレンチ4.5m、東トレンチ3m、南トレンチ6m、西トレンチ6mに延長設定して、約1mの深さに掘りさげた。

北トレンチでは粘土帯と、この粘土に接した立ち上がり土層を確認した。粘土は最上部の被覆粘土であり、立ち上がりは墓壁の壁であることが後にわかった。

東トレンチでは表土下に中央に向かって落ち込む粘土と土器片を含む土層を認めたが、この土層は盗掘による埋め戻し土層であったことが後にわかった。

南トレンチでは墓壁壁を確認し、中央に向かってゆるやかに落ち込む土層に粘土や土器片を検出したが、これらは後日、盗掘に伴うものであることがわかる。また、トレンチ西壁際に土層の落ち込みを認め、第2主体ではないかとの観測を持っていたが、この落ち込みは結果として盗掘であった。

西トレンチでは、土層が中央に向かってゆるやかに傾斜しているが、墓壁壁を確認することができなかった。この部分は結果として盗掘によって壁面が攪乱を受けていたために、さらに深い位置で壁面を確認することになる。

十字トレンチの調査で、表土直下から墓壁が掘られていたことがわかり、0点を中心として南北10m、東西7mの範囲の表土除去に取りかかった。その結果、東北区と東南区で墓壁のラインを明確にすることができた。北西区では墓壁ラインは確認できなかった。西南区では、墓壁西側を一部確認したが、それ以外ではラインを明確にできず、盗掘による事実誤認があり、結果として、西南部のコーナーを検出できなかった。

墓壁プランの確認後に、十字トレンチの土層壁を残しながら墓壁内を約1mの深さまで下げた。

北西区と西南区では墓壁壁を追いかける掘り方の結果、墓壁壁の推定地での壁面を押さえることができなく、粘土ブロックを多量に含んだ土層が認められ、盗掘壁の存在があきらかとなった。このため、盗掘部分の埋土除去を優先させた。

盗掘壁は、2ヶ所から開けられていた。第1は墓壁北西コーナー部分から埋葬主体中央に向かって入れられており、最も深い埋葬主体部のところで、表土下3.3mを測る。第2の盗掘壁は西南コーナーから掘られていた。2ヶ所からの盗掘により、埋葬主体に到達して後に粘土梯部分の外側のみを残して、内側だけえぐりとするような盗掘が行われたようである。このため、主軸から東の粘土梯の外梯部分がそっくり残った形となった。主体部調査区から外へ広がる盗掘壁は未発掘である。

盗掘壁からは勾玉、管玉、鉄刀、鉄矛、鉄剣が出土している。

墓壁の土層を見ると、上半部の表土下1mほどは中央が凹むレンズ状の堆積が安定して認められたために未掘壁の可能性があったが、下半部に到ると粘土ブロックが褐色土と混在した土層を

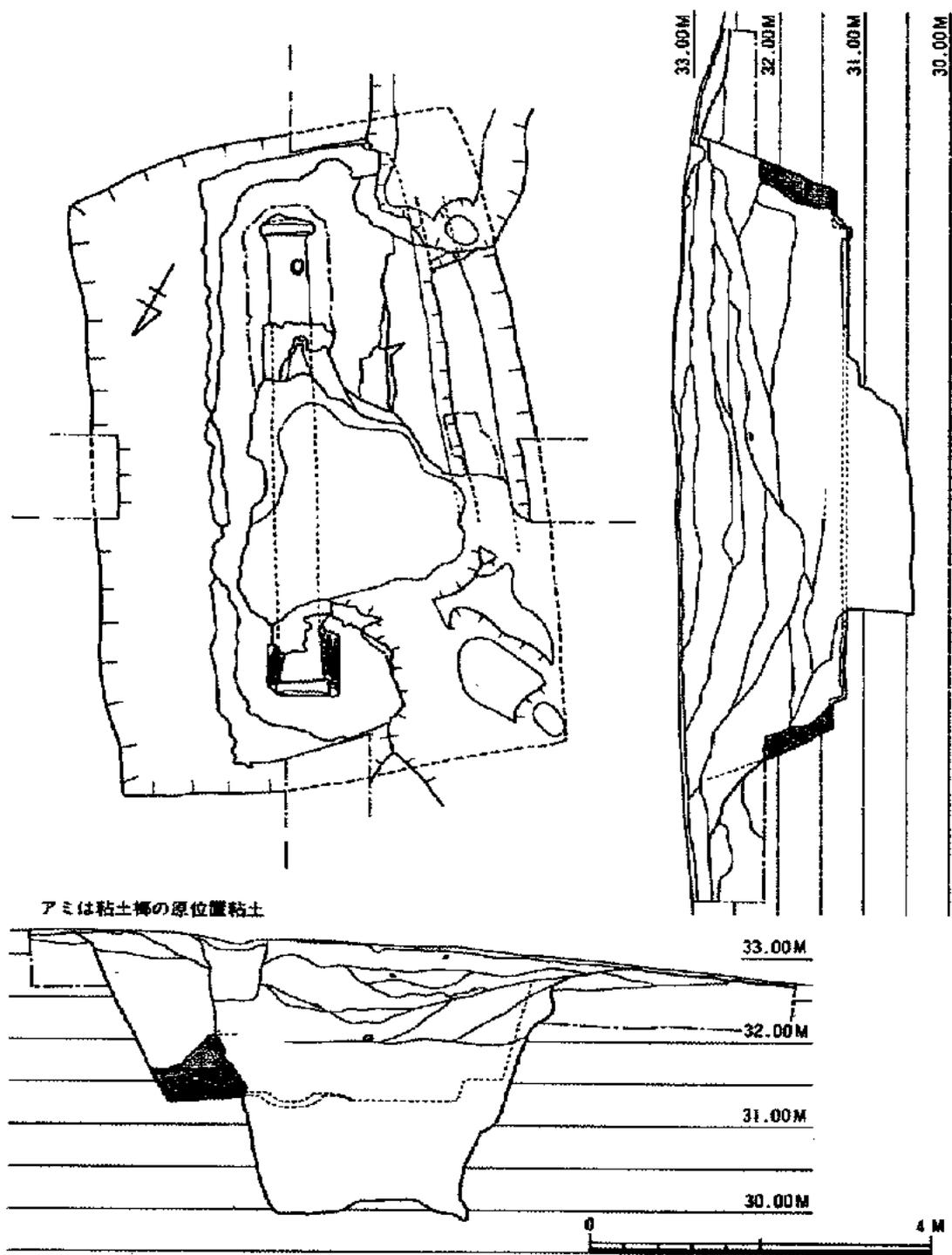


図15 主体部実測図 (1/80)

示すに至り、盗掘の存在を認めることになった。墓壇中央部の表土下から集積をみせていた土器片は、完形に復原できたものであるが、おそらく、盗掘時に完形であった土器を1個体分そっくり抜きとり、盗掘後に埋め戻した際に凹みの中に完形品のまま投げ込んだものと考えられる。土器片には完形土器以外に、1個体分以上の破片が認められる。

粘土椀は、徹底的に盗掘を受けており、埋葬主体には1点の遺物も見出すことができなかった。

南側の埋葬主体部で、粘土椀内に落ち込むようにして、板石1個体と破片数個が検出された。完形の板石は長さ66cm、最大幅43cmの長方形で厚さ6.5cmを測る。石材面は丁寧に調整しており、平坦をよく保っている側には赤色顔料が見られ、顔料は片方の長側面に及んでいる。横長に立てかけられていたことを示すものであろうか。他の板石は2個体部と考えられ、厚さ3.5cmと2.0cmあり、面はよく整えられて、両面に赤色顔料が塗布されている。

これらの板石は、埋葬主体に伴うものとは考え難く、主体部盗掘時に投げ込まれた土器が2個体以上存在することから土器と板石がセットで主体部埋葬後の2次以降の埋葬主体が考えられるが、その構造等については、検討を要する。

埋葬主体は精査後に粘土、顔料の資料を採取し、盗掘により破壊を受けた部分を突きかためながら埋め戻し、埋葬主体の棺床のレベルから表土の高さまで、全ての土をふるいにかけて後に丸太棒で突きかためながら埋め戻した。

#### 4. 遺 構

墳 丘 (図16) 畑地造成や基地による削平を受けており、また本古墳の築造が葺石を用いない方法をとっているために、墳丘の復原には根拠に乏しい点もあるが、あえて各トレンチの調査により、墳丘復原をすると、基底面で全長64.4m、後円部径38.96m、後円部高7.68m、前方部先端幅推定30m、前方部高5.36m、くびれ部幅22mを測る。

先述の葺石を用いない墳丘築造と墳丘削平や墳丘盛土の流失により、墳丘の段築は復原が難しいため、今後検討課題として残しておきたい。

墳丘上に見られた拳大の玉石の存在は、明確に葺いた状態で検出できなかったために、断定はできないが、福岡市老司古墳に見るように墳丘上面を葺いていたものであろうか。

外 堤 古墳の南半分では外堤が馬蹄形状に後円部のみを囲んでいる。1～3トレンチの調査から、外堤には盛土は認められず、埴輪列等の施設もなかった。2トレンチでは、外堤の高さ2.3m、裾での幅12mを測る。墳丘と外堤に挟まれた溝は、終息するところが最も狭く、14トレンチから1.3mを測る。最も広いところでは、1トレンチの調査から4.88mとなる。

本古墳の西側に位置する3号墳は、墳丘が外堤の上に乗ることになり、3号墳の墳頂部が本古

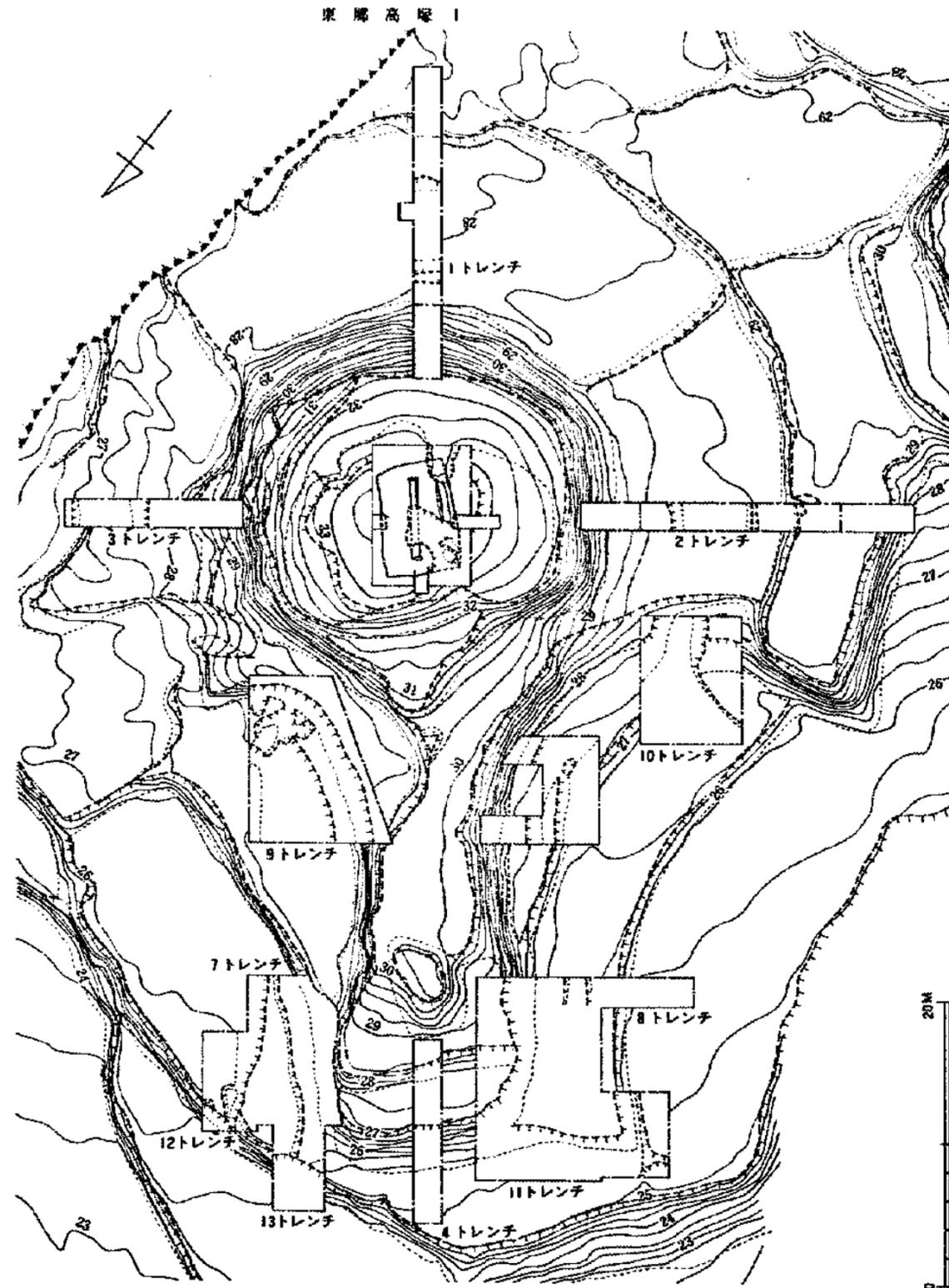
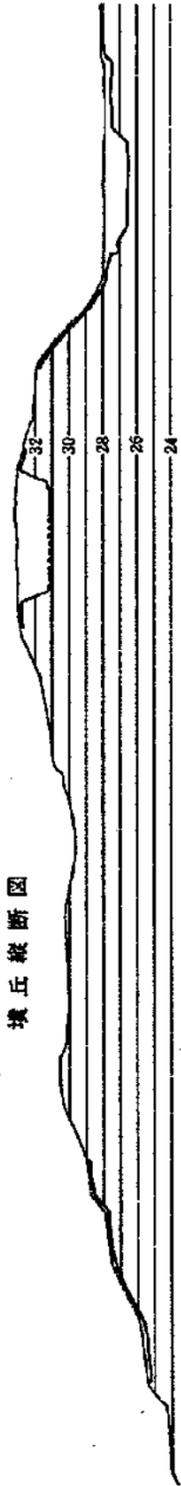
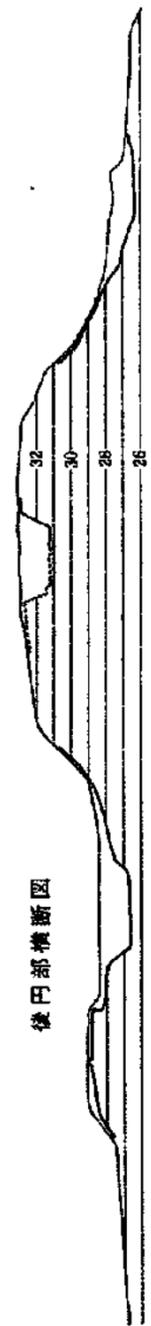


図19 墳丘実測図 (1/400)

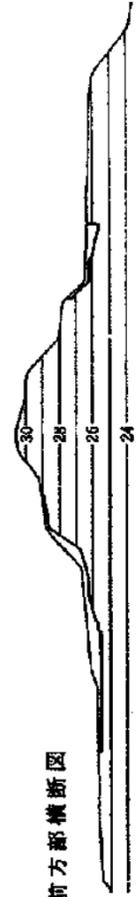
墳丘縦断面図



後円部横断面図



前方部横断面図



墳よりも高くなり、2つの古墳の関連が注目されるが、今回の調査では見送りとなった。

主体部 墓壇は、後円部の中央に位置する。表土除去後に平面プランが確認できており、主体部上の盛土があまり削平を受けていないと仮定すると、墳丘盛土後墓壇を直接掘り込んだものと考えられる。表土から盗掘壕底まで3.3mを測るが、底部は盛土面であり、地山に達していなかった。

排水施設については、盗掘により復原不可能である。墳丘西側14トレンチ内の石組み遺構を排水施設の先端部と推定しており、このことから、主体部の西北墓壇隅に排水施設が設けられていたものと解したい。

墓壇は不整の長方形で、最大長7.8m、最大幅5.2m最深2mを測る。

埋葬された割竹型木棺は、内法で最大長5.4m、推定径0.7m前後となる。小口部の構造は、木棺本体を小口板で挟み込む構造となる。

木棺の被覆粘土は、長さ7.2m、幅2m、厚さ0.9mとなる。

主体部の構造は、割竹型木棺をもつ竪穴式石室の石室部分が、そっくり粘土に置きかわったものと言える。

排水施設 (図17)

14トレンチの南東隅の墳丘中に検出した石組み遺構は、主体部からのびてくる排水施設の末端と考えられる。石組み遺構は後円部と外堤との幅が最も狭くなるところで終わる。

トレンチ内で検出したのは長さ1m、幅0.6mの範囲であ

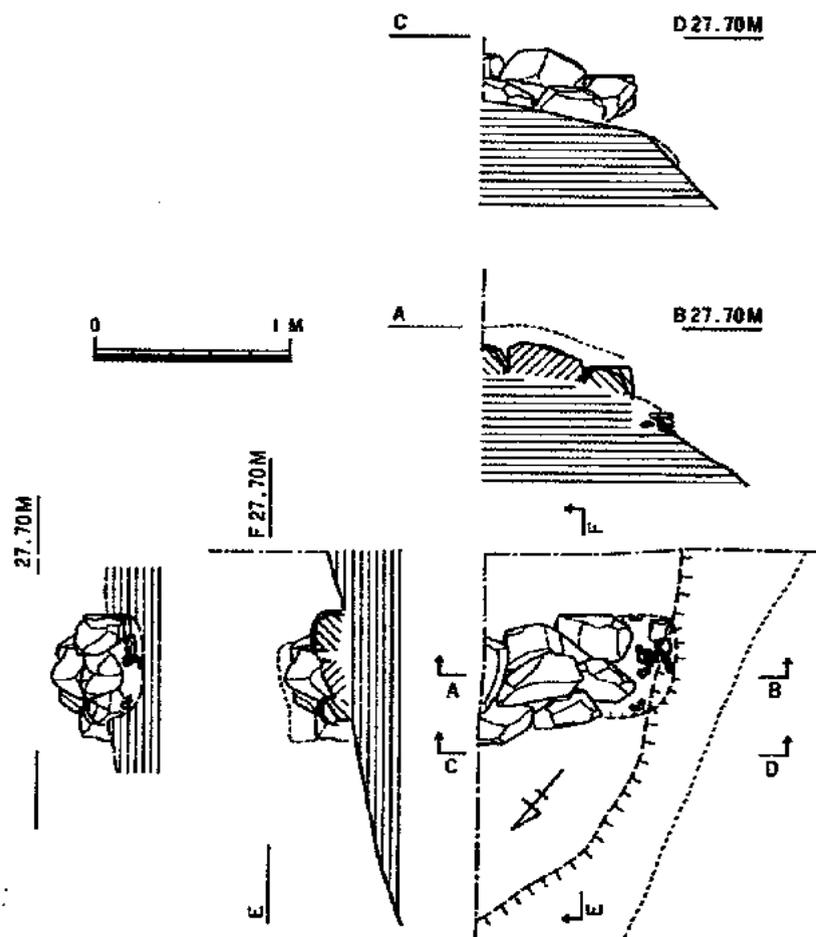


図17 14トレンチ石組み遺構実測図 (1/40)

る。長さ40~50cm、幅20cmほどの塊石を利用して、2段に積み上げているが、石材の面を合わせる積み方ではない。この塊石下には小礫が敷きつめられている。横断面の観察では塊石下は断面U字形に溝状に掘り込みをつくり、内部に小礫を敷きつめ、上部を塊石で覆い、さらに上面を粘質土で覆っている。

土師器出土遺構 (図18) 9トレンチのくびれ部から前方部へ移った墳丘立ち上がり斜面に完形の土師器壺が出土した。土器の下は斜面がすり鉢状に凹んでいる。置かれたか投げ込まれたものかは不明であるが、出土土師器は、この一点だけが他の同種のものとは違いが見られる。

粘土壤 (図19) 9トレンチの前方部傾斜面で検出した遺構である。平面0.5×0.4mの楕円形状のプランに深さ20cmほどに掘り込まれており、中には青白色の濁った粘土がつまっていた。

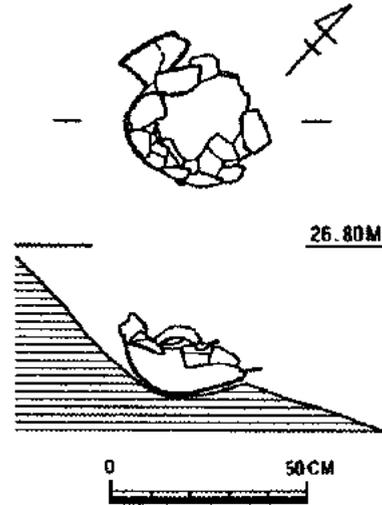


図18 9トレンチ遺物出土遺構 (1/20)

## 5. その他の遺構

3年次にわたる調査では、本古墳に係わる以外の時代の遺構が検出されたのでここで報告しておきたい。

1号堅穴 (図20) 2トレンチの外堤上に築かれていたもので、床面の直径2mほどの円形の堅穴である。断面の立ち上がりは袋状となり、底部は平坦である。出土遺物から弥生時代前期の貯蔵穴と思われる。また本堅穴の西に隣接して2号堅穴のプランを検出したが未調査である。

1号火葬所 (図21・図版9) 1トレンチの中央部の埋土中から掘り込まれた遺構である。平面形は長さ0.95m、幅0.6mの隅丸長方形で、深さは0.55mを測る。壁面は急で床面はほぼ平坦で、4個の塊石で棺台をつくっている。壁面は焼けており、一部壁が崩れ落ちている。棺台付近からは焼骨が出土している。

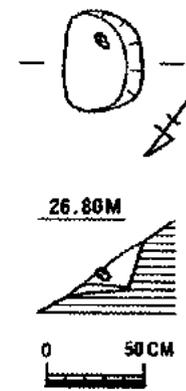


図19 9トレンチ粘土壤 (1/40)

2号火葬所 (図22・図版9) 1トレンチ内の1号と隣接してつくられており、同一土層面から掘り込まれている。平面形は長さ1.3m、幅1.1mの不整長方形を呈しており、2段掘りである。深さは、1段目が0.45m、2段目が0.15mとなる。壁面は焼けた痕跡が認められる。底部は隅丸長方形で平坦である。焼骨を検出した。

3号火葬所 (図23・図版9) 2トレンチ内の墳丘地山整形面に掘り込まれていた。平面形は、長さ0.75m、幅0.4mの長方形である。

深さは0.4mを測る。床面は平坦で、棺台を2石据えている。埋土中に塊石の落ち込みが見られた。埋土中からは焼土や炭および焼骨をわずかに検出した。埋土中の石材からすると、火葬後にそのまま火葬墓として利用したものであろうか。焼骨の量はわずかであることを考えると検討の余地がある。

## 6. 出土遺物

各調査区から遺物の出土があり、弥生時代から現代に及んでいるが、本古墳に直接関わる主要なものを挙げると、次のとおりである。

主体部の遺物は全て盗掘坑からの出土であり、勾玉1、管玉4、鉄刀片、鉄剣片、鉄矛1片、刀装具、2重口縁甕1点が出土している。

勾玉はヒスイ製の丁字頭勾玉で、5条の頭部刻線をもつ。管玉は4点とも珪質凝灰岩製である。他の鉄器は全て破片で出土した。各調査区からは3タイプの壺形土器の出土があった。

**Aタイプ** 広口の口頸部の頸部に高い三角形突帯が一条巡るが体部は不明。口縁部径は40cmを越え、口頸部の高さは20cmを越える。頸部中位の屈曲部に一条の三角形突帯が巡る。

**Bタイプ** 広口の頸部に比して小さな倒卵形の体部がつき、底部に焼成前の棒状工具による穿孔がある。口縁部

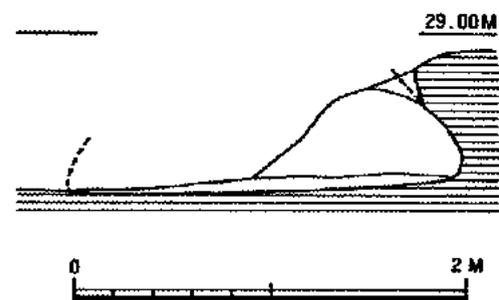
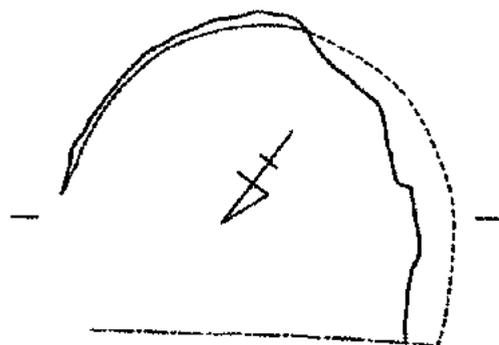
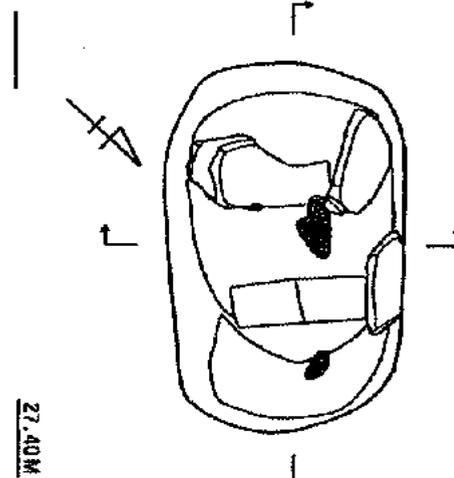


図20 1号壙穴実測図 (1/40)

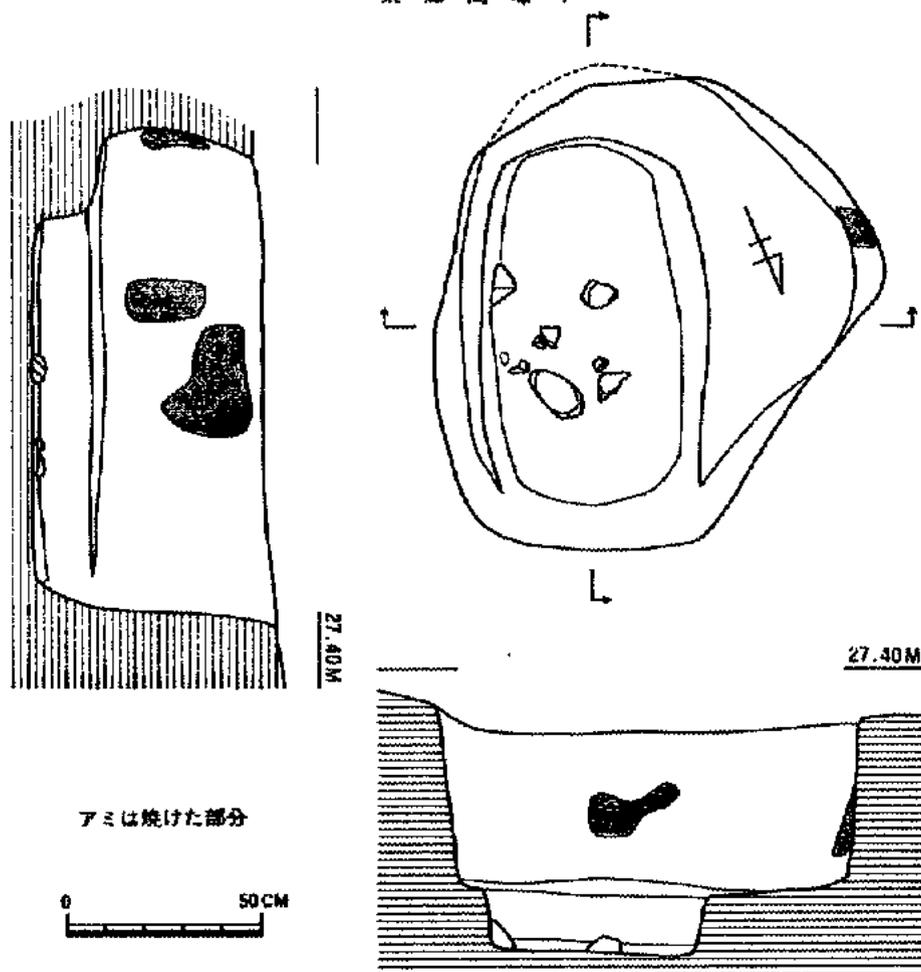


アミは焼骨の範囲



図21 1号火葬所実測図 (1/20)

東郷高塚 I



アミは焼けた部分



図22 2号火葬所実測図 (1/20)

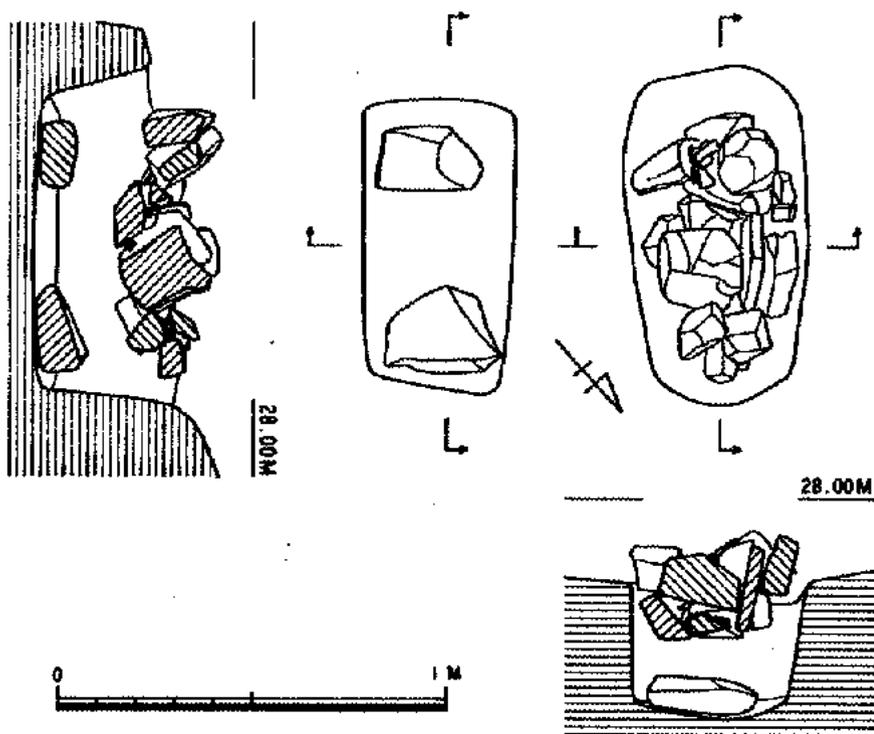


図23 3号火葬所実測図 (1/20)

径は25~30cmで口頸部の高さは、Aタイプの1/2強となる。器高は45cm前後となる。

Cタイプ Bタイプに比べ、やや小振りである。体部はBタイプに比べてやや丸味を帯びる。頸部の外反が強い土器。器面に赤色顔料が見られる。A~Cタイプともに器面に細い縦ハケ目痕が見られる。

Dタイプ 大型の二重口縁壺で器面に赤色顔料が見られる。体部は倒卵形を呈し、肩部に沈線が一条、途切れながらも巡っている。器面は内外とも細いハケ目調整が見られる。

壺型土器はC・Dタイプが1点ずつ。最も多いのはBタイプである。このA・Bタイプの土器が墳丘上を巡っていたものと推定でき、Bタイプの土器の間にAタイプのものを配置したものと考えられる。口頸部の大きさからAタイプの土器の器高がBタイプより高いことが推測できる。

2トレンチ内出土遺物(図24) トレンチの溝中央で、2個体の壺型土器が出土した。同タイプの土器で、いずれも完形品である。基底面からは20cmほど浮いた状況であるが、最下層の埋土は地山と見違うほどの濁れのない土層であり、墳丘形成と相前後して流れ込んだ土である。このため、2点の土器は、古墳築造後、中世に火葬が行われた時期の間の溝が埋まるときに流れ込むか、捨てられたものであろう。Bタイプに属する土器である。

この2個体の土器以外に遺物の出土はなかった。

14トレンチ内出土遺物(図25) これらの土器群は、馬蹄形溝が最も狭くなる地点で集中して検出した。出土土器はA・Bタイプの壺型土器のほか、把手を持つ甕型土器が出土している。北側に分布するA・Bタイプの土器が、地山土の黄褐色の地山の土に近い土層内に出土しているの

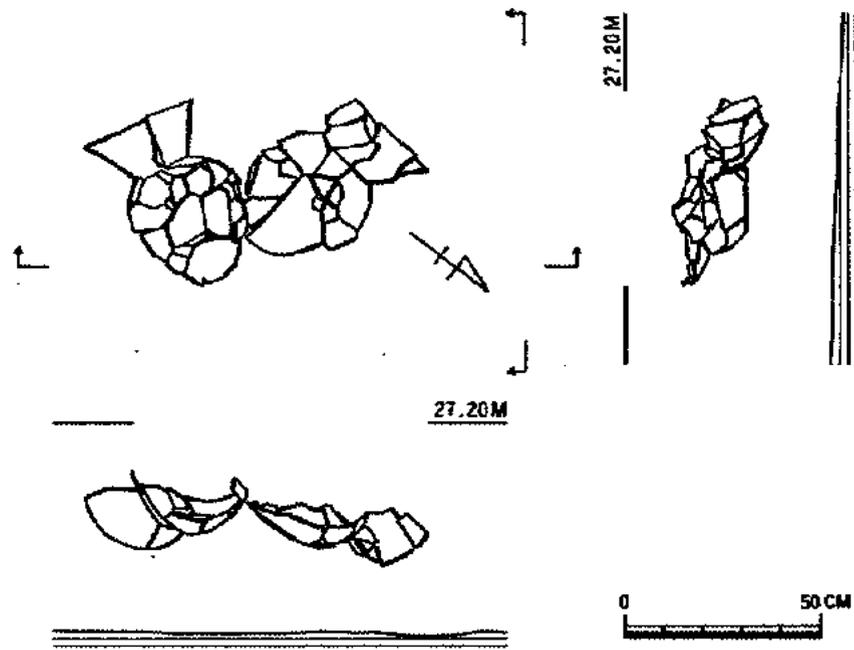


図24 2トレンチ遺物出土状況実測図(1/20)

に対し、甕型土器を含む一群は、黄褐色土層より上の層からの出土であり、出土状態からすると埋まるまでに時期差が考えられる。

註5. 北九州市自然史博物館の藤井厚志氏の鑑定による。

## 7. お わ り に

3ヶ年にわたる調査で、本古墳についての様々の成果を上げることができた。成果および課題を次のとおり示すことで、本報告へ向けての指標としたい。

**墳 丘** 各トレンチの調査では、墳丘を切る調査を実施しておらず、地山整形面および墳丘盛土の状態を明らかにできなかったが、弥生時代の遺構検出からすると、本古墳築造以前の弥生時代前期の段階には、本古墳を含む丘陵上は、ある程度の範囲が平坦面を有していたものと思われる。このため、本古墳の企画は楽に行えたものと推測される。主体部盗掘墳では、墳丘下3mでも地山面に至らず、盛土層であったため、少なくとも3m以上は盛土により墳丘を築き上げたものと言える。

本古墳の規模については、墳丘に耳石を使用しておらず、地山整形を盛土により形成されているため、墳丘の規模確認に困難を極めたが、現況で捉えることのできた墳丘基底面の計測値は次のとおりである。

墳丘全長 64.4m、後円部径 38.96m、後円部高 7.68m、くびれ部幅 22m、前方部高 5.36m、後円部墳頂部標高 33.30m

**外 堤** 後円部のみを囲む馬蹄形状の外堤である。外堤上には盛土、埴輪等を認めることはできなかった。外堤は馬蹄形溝の基底から約2.3mの比高差となる。また、外堤の基底面での幅は12mとなる。

後円部と外堤に挟まれた溝は、基底部で最大幅4.88m、最も狭いところは、幅1.3mとなる。本古墳の外堤プランは、やはり、地形的制約によるものであろうか。

**主 体 部** 全面的な盗掘を受けており、遺物の大半を失っているが、構造的には多くのことを知り得た。

墓壇は、主軸が墳丘軸に平行し盛土上面から直接掘り込まれている。墓壇西壁に段上部を一段設けている。墓壇の深さは2mとなる。埋葬主体は主軸が墳丘主軸に平行する粘土槨で、粘土槨内には割竹型木棺が収まっていた。棺の構造は、両小口板で棺主体を挟み込む方法である。棺の内法長は537~540cmとなる。棺内外とも盗掘により、原位置を保つ遺物は出土していない。

古墳の規模は、三国の鼻1号墳や安徳大塚古墳に計測値が近く、築造時期についても近接する時期が考えられるのではなかろうか。

調査で出土した土器は、大半が壺型土器であり、小型精製土器を含まない。A・Bタイプの土  
(註6)

器群は、三国の鼻1号古墳的な配置を暗示しているように思われる。墳丘上に立ち並ぶのはBタイプが主で、Bタイプ土器の数個に1個体の割合で、Aタイプが配列するのではなかろうか。

A～Cタイプの土器とも、底部に棒状工具による焼成前穿孔があり、埴輪を意図したものであろうが、三国の鼻1号古墳ほどには明瞭でない。

土器のプロポーシオンは老司古墳の埴輪に似るが、体部下半に大きな違いが見られる。本古墳の築造は老司古墳に先行する時期を考えたい。

本古墳は、珪石を使用した段築構造ではないため、後円部・前方部ともに段築復原が課題となる。前方部墳丘上に見られた拳大の玉石についても検討を要する。出土遺物については、全個体の実測後に検討を加えたい。

現段階では、当地域最古の前方後円墳の位置を占めることがわかった。出土遺物から当然予測された、沖ノ島祭祀遺跡との関係は明らかにできなかった。

註6. 片岡宏二 1985 三国の鼻遺跡 I 小都市文化財調査報告書 第25集

主体部の構築法

単位 cm

項 目	長 さ	幅	深さ(厚さ)	備 考
墓 墳 の 平 面 プ ラ ン	710~780	470~520	180~200	盛土上面から掘り込む。
墓 墳 の 底 部	610~630	290~360		東北隅→西北隅へ時計まわりに低くなる。
墓 墳 の 段 状 部 形 成		50	30	西壁に取りつく。
排 水 施 設				推定、西北墓墳隅から墓墳外へ延びる。
埋 葬 墳 の 段 状 部 形 成	650	140	5	墓墳底からさらに段状部を残すように削り出す。小口部と南北壁との間は低く閉まっている。
埋 葬 墳 の 掘 削	590	70~75	15	横断U字形
埋 葬 墳 の 小 口 部 の 掘 削	13~15	75	墳底から5	埋葬墳自体にも小口部を掘り込む。
埋 葬 墳 の 赤 色 顔 料	600	140	—	段状部のほぼ全面に顔料を敷く。
埋 葬 墳 の 砂	600	110~120	—	墳の内面は厚いところで5~10mmとなる。墳の上端面は薄い。小口部は非常に薄い。
1 次 粘 土 床 の 粘 土	690	140	(3~5)	棺床部分は3~5cmの厚さで平均的につくる。全体としては段状部を覆うように粘土を敷く。
1 次 粘 土 床 の 赤 色 顔 料				粘土面の全面に塗布。
割竹型木棺の 下棺の設置	棺床面 小口下端 537~540	60~70	—	—
割竹型木棺の下棺の固定				粘土と赤色顔料を交互に使い、2~5次の下棺固定作業。
割竹型木棺の下棺の 外側固定				下棺本体の固定後に棺の外側20cmほどに顔料・砂・玉石を敷く。
小 口 板 の 設 置				小口板の外側には砂・玉石を用いていない。
1 次 粘 土 被 覆	620	上面 200 下面墓墳底	(30)	小口板もこの時点で粘土で固定。南北では被覆粘土面が墓墳壁に至る。下棺上面の高さまで粘土被覆。
1 次 墓 墳 埋 土				1次粘土被覆上面の高さまで黄褐色ソフト土で埋める。
割竹型木棺の上棺設置				
2 次 被 覆 粘 土	720	上面 200	(50)	南北では粘土上面が墓墳壁に至る。東西では裾が墓墳壁までのびる。段状部面にも粘土が見られる。
2 次 墓 墳 埋 土				全面に黄褐色ソフト土で覆う。

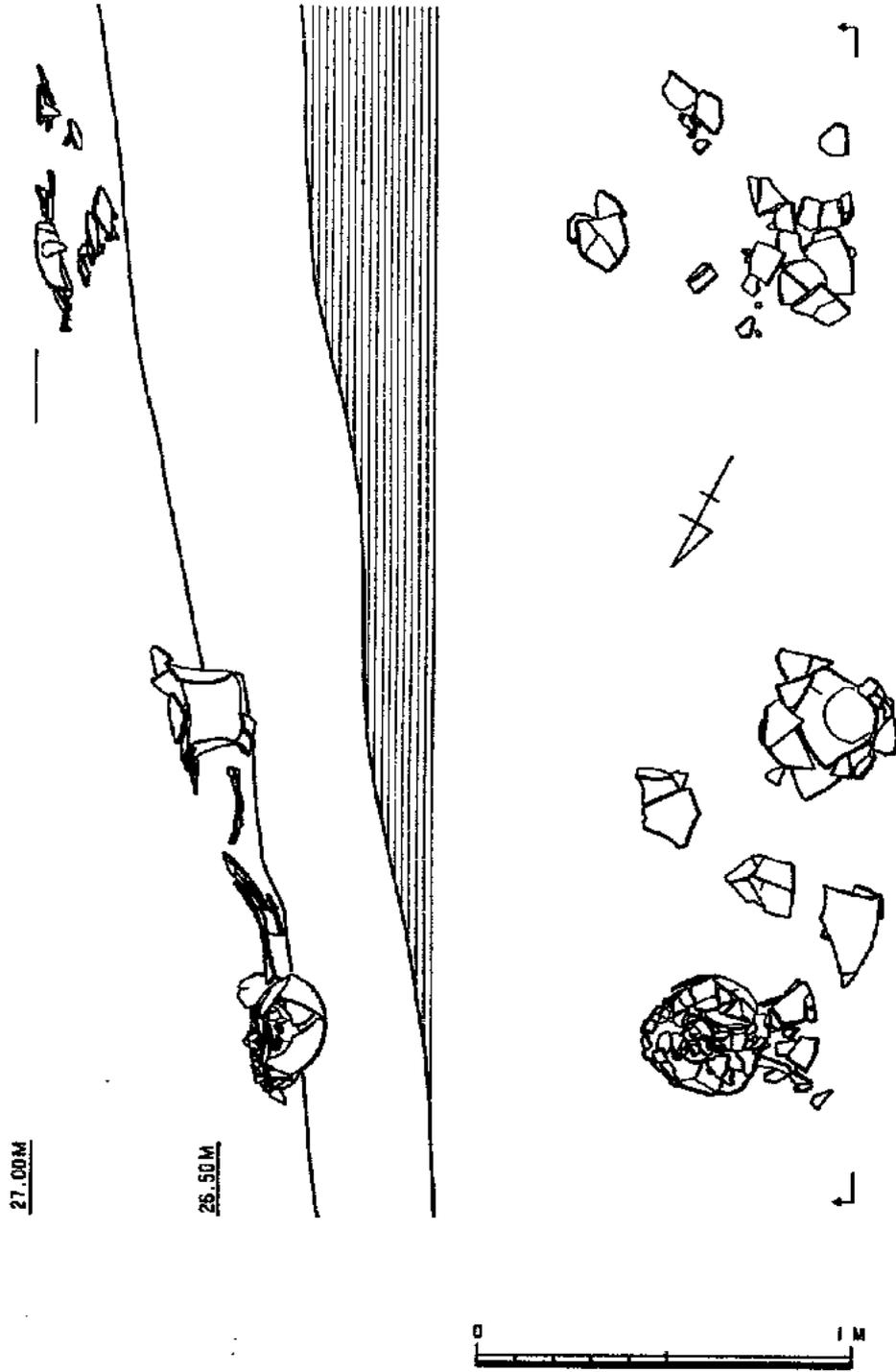


図25 14トレンチ遺物出土状況実測図 (1/20)

機 構 調 査 成 果 表

単位：m

調査区	0	1	2	3	4	7	8	9	10	11	12	13	14	主 体 部	
1 トレンチ初年度	(0 S 10.76)	(0 S 21.92)	(E 1.0 S 21.94)	(E 0.95 S 23.34)	(0 S 23.34)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 33.0)	(0 S 10.76)
1 トレンチ2年度	(0 S 16.0)	(0 S 30.0)	(S 30 W 2)	(S 16.0 W 2)											
2 トレンチ初年度	(0 W 11.75)	(0 W 35.96)	(S 2 W 35.06)	(S 2 W 11.75)											
2 トレンチ2年度	(0 W 16.0)	(0 W 30)	(S 2 W 30)	(S 2 W 16)											
3 トレンチ	(0 E 12.26)	(0 E 24.83)	(E 24.83 S 2)	(E 12.26 S 2)											
4 トレンチ	(0 N 35.93)	(0 N 48.815)	(N 48.815 W 2)	(N 35.93 W 2)											
7 トレンチ	(N 31.465 E 7.35)	(N 31.465 E 11.866)	(N 41.922 E 11.866)	(N 41.922 E 4.92)											
8 トレンチ	(N 31.465 W 4.361)	(N 31.465 W 19.334)	(N 33.465 W 19.334)	(N 33.465 W 13.043)	(N 45.787 W 13.043)	(N 45.787 W 4.361)									
9 トレンチ	(N 10.281 E 5.674)	(N 10.281 E 11.710)	(N 22.156 E 11.710)	(N 22.156 E 1.445)											
10 トレンチ	(N 14.504 W 7.36)	(N 14.504 W 13.094)	(N 22.156 W 13.094)	(N 22.156 W 4.70)	(N 20.156 W 4.70)	(N 20.156 W 9.0)	(N 16.504 W 9.0)	(N 16.504 W 5.680)							
11 トレンチ	(N 29.465 W 12.00)	(N 39.465 W 18.00)	(N 45.465 W 18.00)	(N 45.465 W 12.00)											
12 トレンチ	(N 35.465 E 11.00)	(N 35.465 E 15.00)	(N 42.465 E 15.00)	(N 42.465 E 11.00)											
13 トレンチ	(N 42.00 E 6.20)	(N 42.00 E 10.0)	(N 48.00 E 10.0)	(N 42.00 E 6.2)											
14 トレンチ	(N 6.00 W 16.0)	(N 6.00 W 23)	(N 15.00 W 23.00)	(N 15.00 W 16.0)											
主 体 部	(N 4.00 E 3.0)	(S 6.00 E 3.0)	(S 1.00 W 4.0)	(S 1.00 W 6.0)	(S 0 W 4.0)	(N 4.00 W 1.0)	(N 4.00 W 1.0)	(N 4.52 W 1.0)	(N 4.52 W 1.0)	(N 4.00 W 1.0)	(N 4.00 W 1.0)	(N 4.52 W 1.0)	(N 4.52 W 1.0)	(N 4.00 W 1.0)	(N 4.00 W 2.0)

※ 埋設主体は、(0.0)を運る南北と(0.S2.90)、(0.N1.70)で東西に断断する幅約20cmのミニトレンチを開けた。

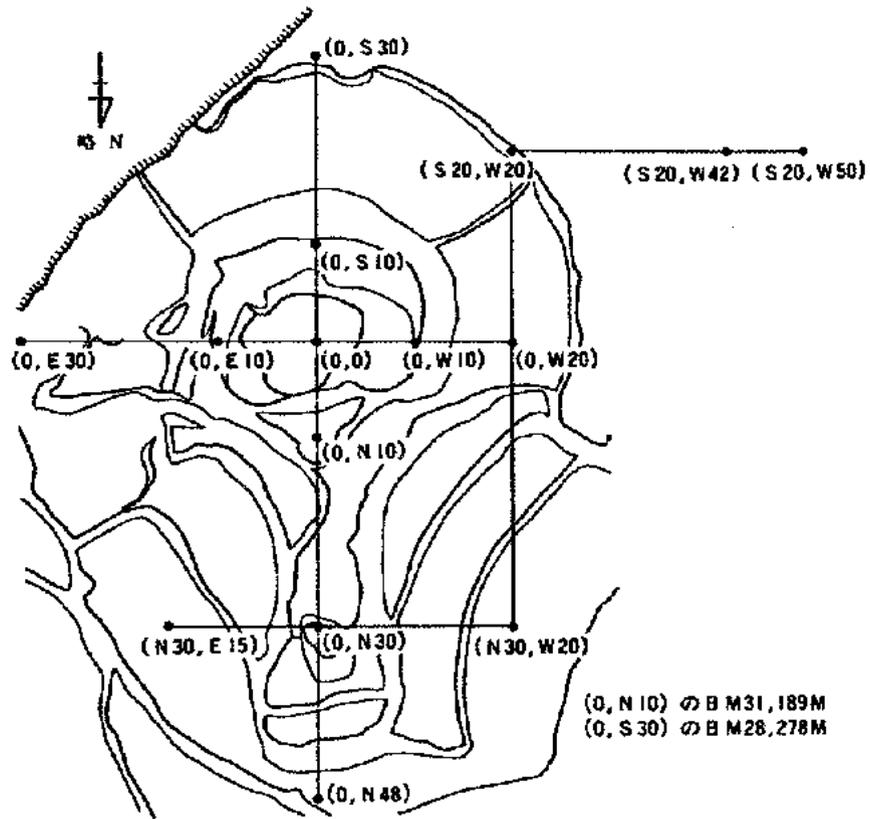


図26 測量成果図 (1/800)

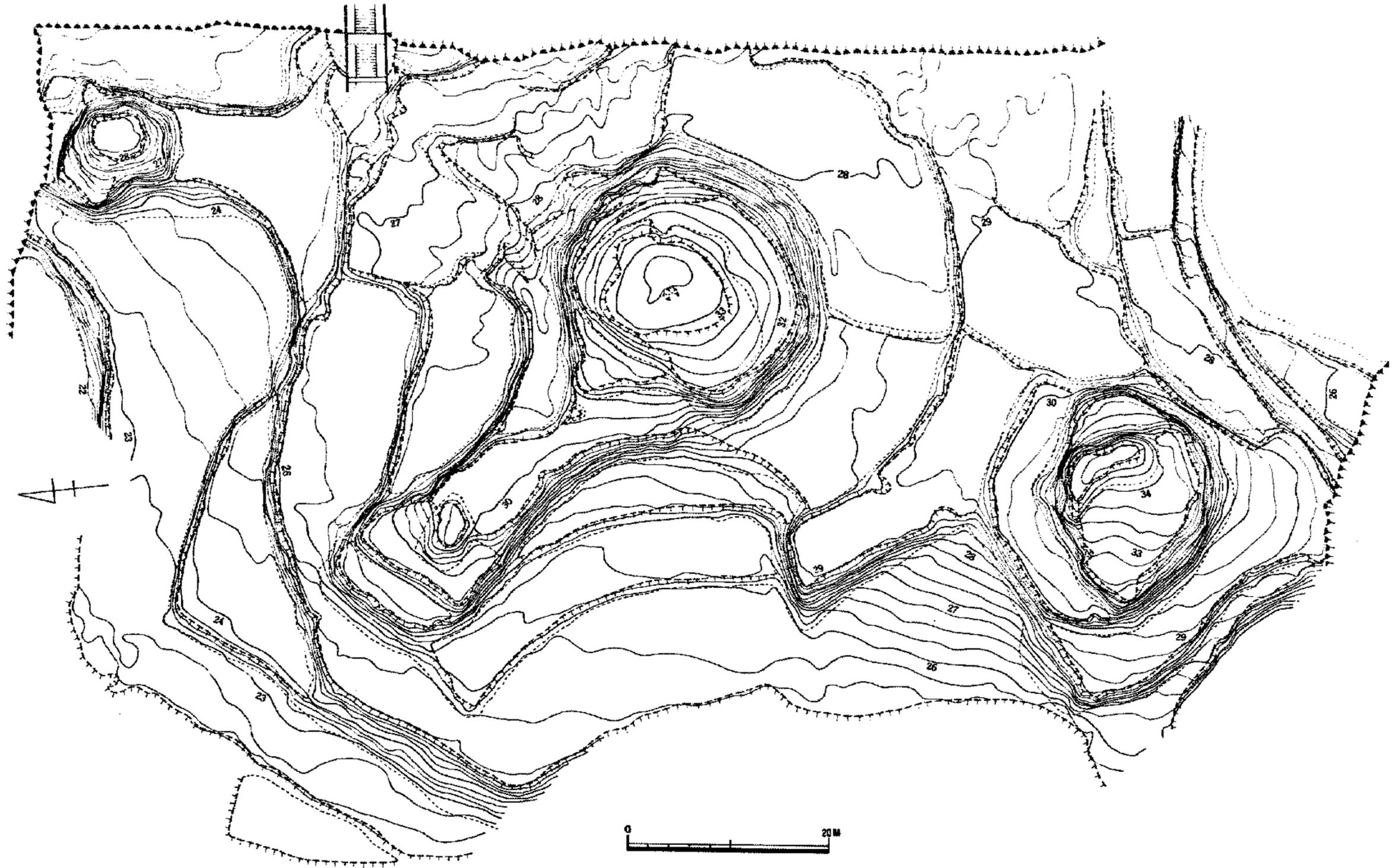
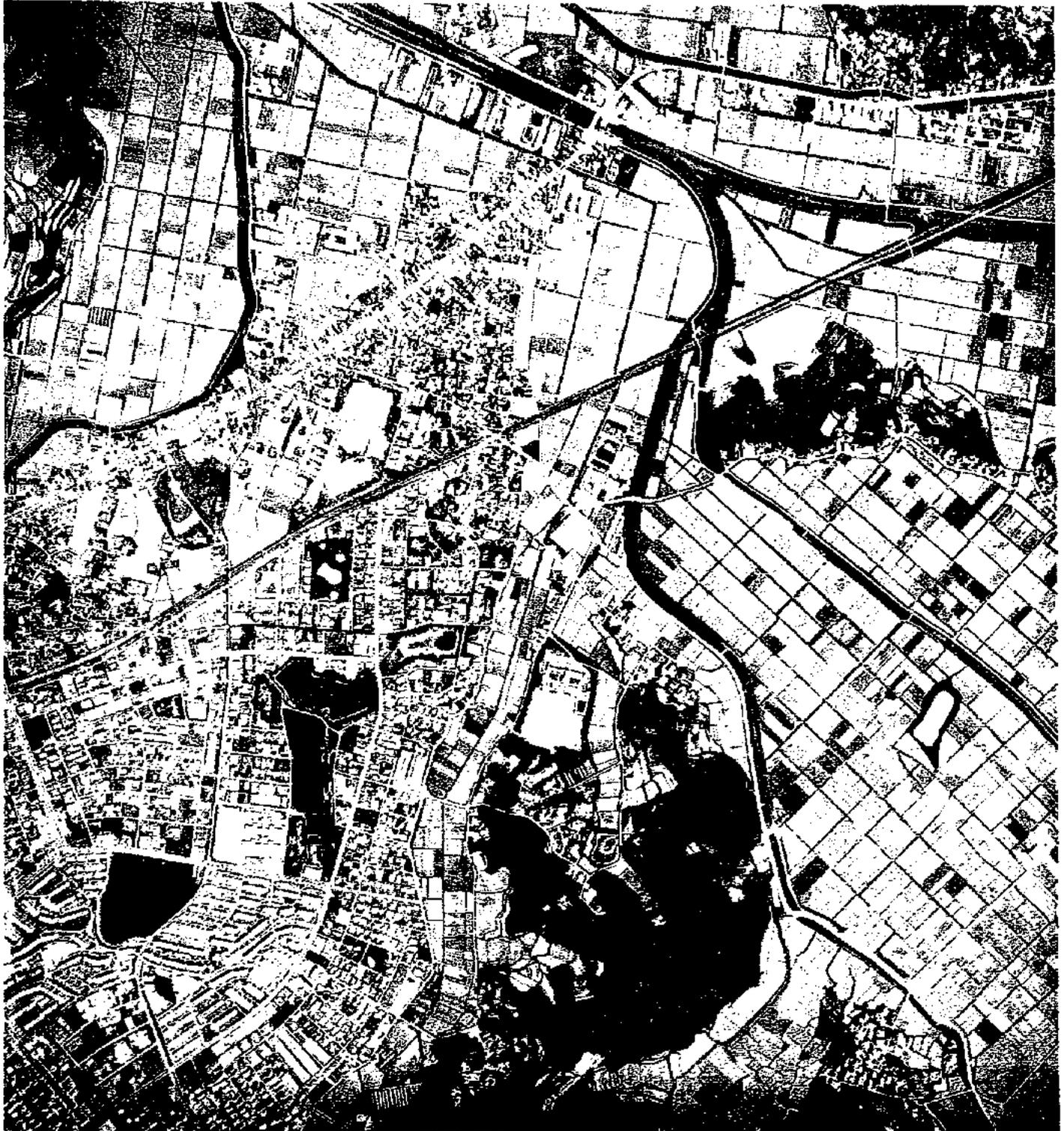


図27 現況測量図 (1/400)

圖 版



古墳の位置と周辺の航空写真 (1/12,500 1978年6月撮影)



後円部（北東から）



前方部（東南から）



後円部（右）と外堤（左）（東から）



後円部墳頂（伐採後、北から）



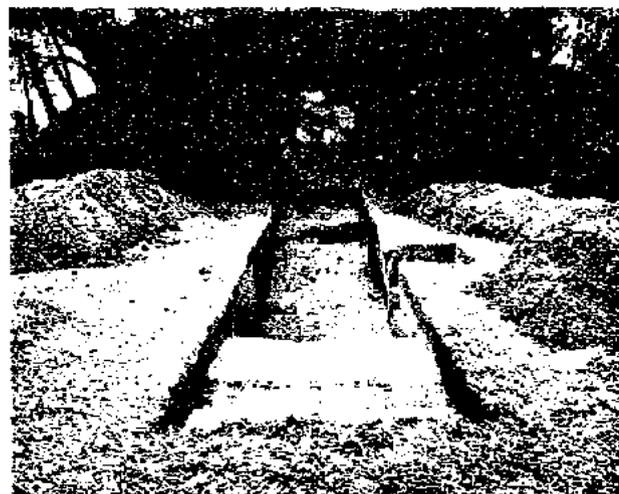
東郷3号墳（東から）



東郷5号墳（西から）



1トレンチ初年度 (南から)



1トレンチ2年度 (南から)



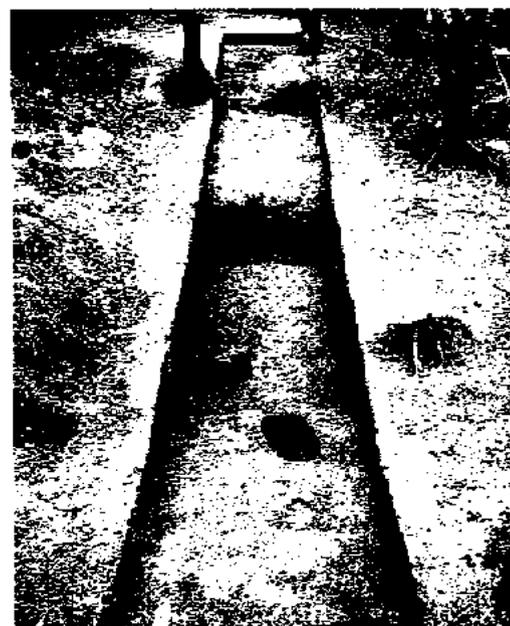
2トレンチ初年度 (西から)



2トレンチ2年度 (西から)



3トレンチ (西から)



2トレンチ (東から)



4トレンチ (南から)



4トレンチ (北から)



7トレンチ (南から)



8トレンチ (北から)



8トレンチ境丘 (北から)



8トレンチのサブトレンチ (東から)



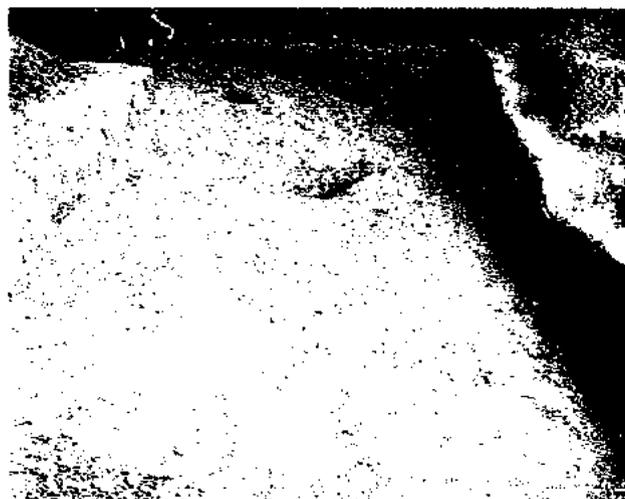
9トレンチ (南から)



9トレンチ (南から)



10トレンチ (北から)



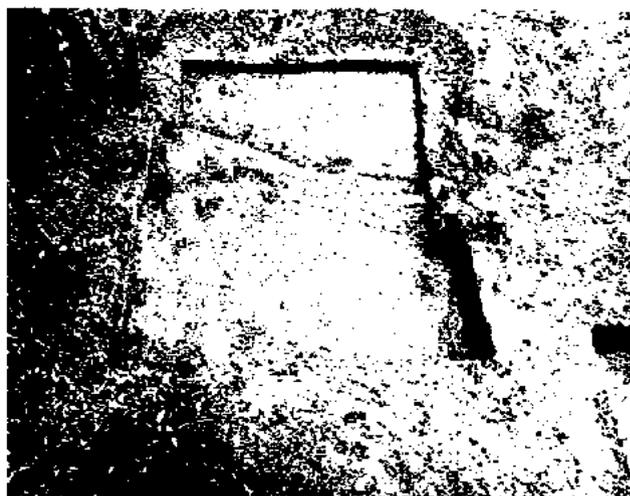
10トレンチ (北から)



11トレンチ (西から)



12トレンチ (西から)



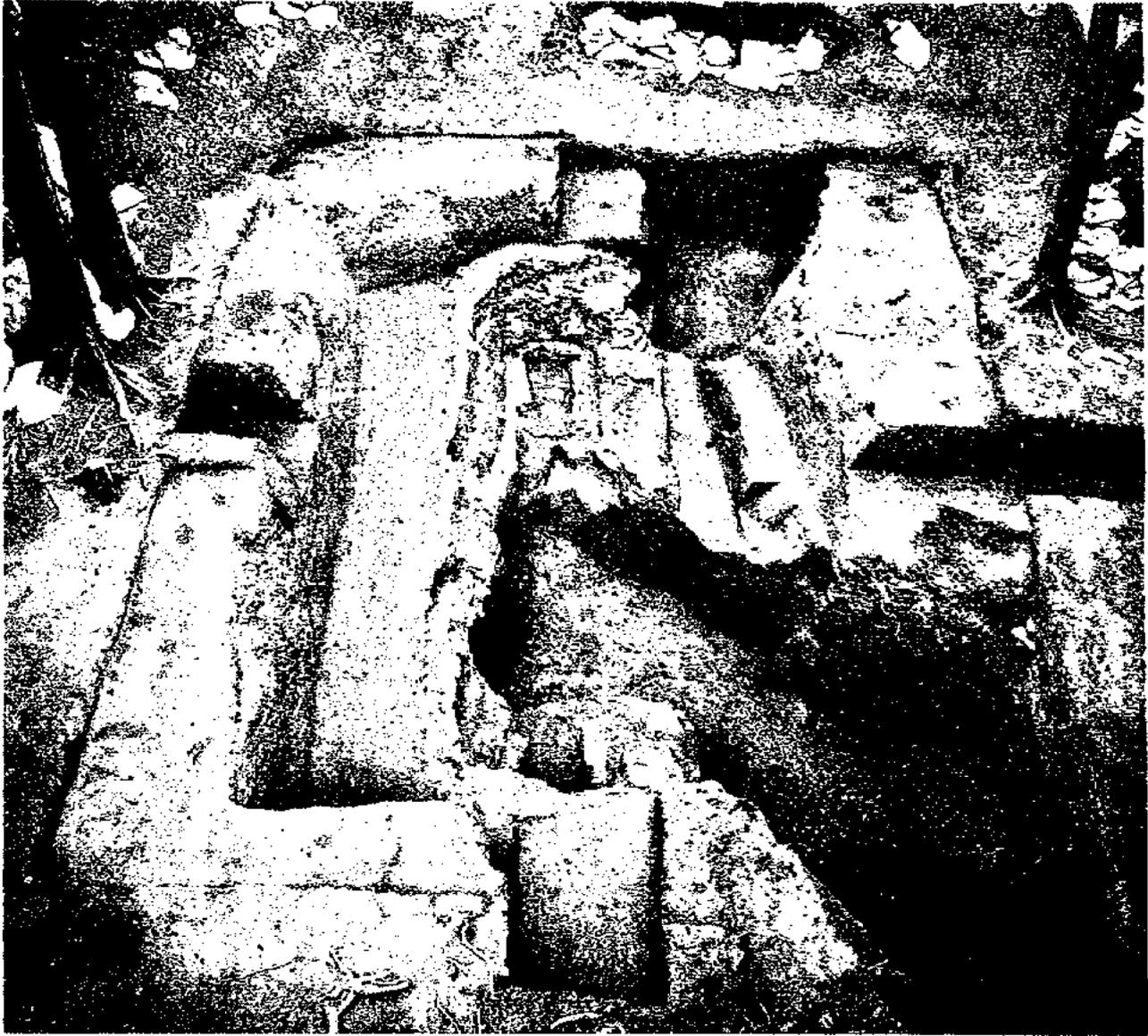
13トレンチ (南から)



14トレンチ外堤 (北から)



14トレンチ (北から)



主体部全景（北から）



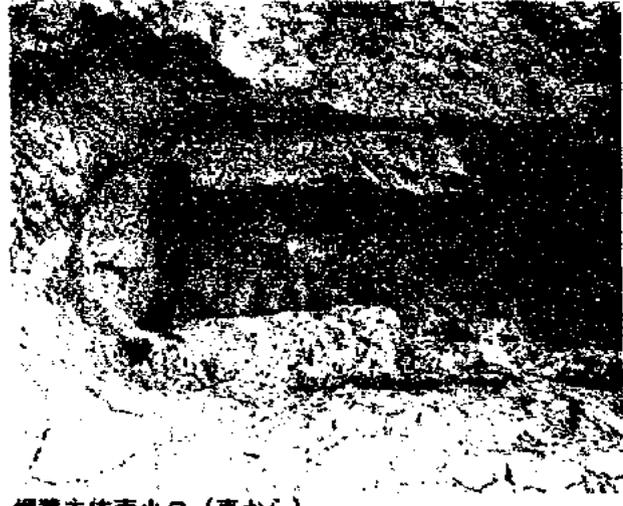
埋葬主体北側小口（南から）



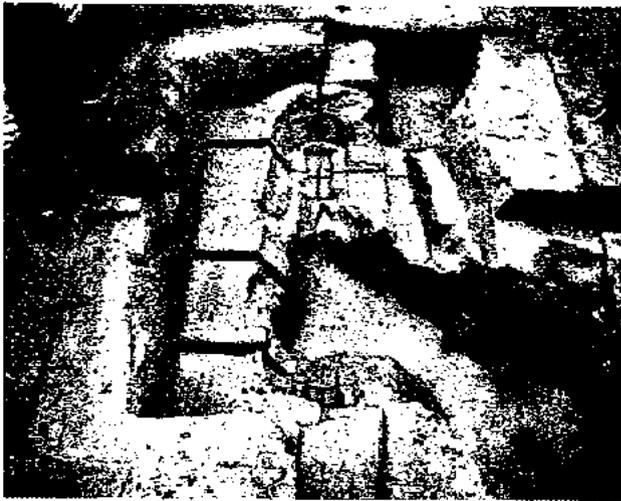
埋葬主体北側小口（東から）



埋葬主体南小口（北から）



埋葬主体南小口（東から）



埋葬主体の断面調査（北から）



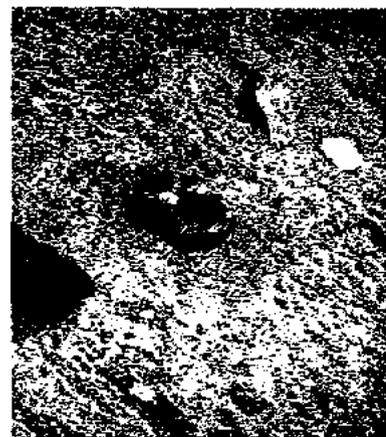
埋葬主体西側土層（北から）



14トレンチ排水溝



2トレンチ遺物出土状況



9トレンチ遺物出土状況



14トレンチ遺物出土状況 (北から)



1号竪穴 (東から)



1号火葬所 (西から)



2号火葬所 (西から)



3号火葬所 (西から)



壺型土器 D



壺型土器 B



壺型土器 B



壺型土器 C

# 東郷高塚 I

宗像市文化財調査報告書 第21集

平成元年 3月31日

発行 宗像市教育委員会  
福岡県宗像市東郷995

印刷 青柳工業株式会社  
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

